

# 日本語の原初母音体系について

## 意味論的アプローチ

小林 正 憲

(平成19年9月26日受理 最終原稿平成19年12月11日受理)

母音体系のモデルとしてはDaniel Jonesが提案した基本母音図が最もよく知られている。これは四角形モデルであり八つの基本母音が舌の最高位置に従って配置されている。このモデルによって表わされるような母音体系は口腔内部に想定される母音空間を十全に無駄なく均等分割するから、伝達手段としての母音の体系を形成するためには最も合理的であると考えられる。ところがこのような四角形モデルで表わされるような母音体系をもっている言語は世界中でもごく一部の少数派にすぎない。多数派を占めるのは[a]の頂点を下にした逆三角形モデルである。このモデルで表わされる母音体系は母音空間を完全に使い切っているとは言えない。このことから、自然言語はコミュニケーションの手段として最大の効果を上げることを目的として音韻組織を発達させてきたわけではないと推測することができる。音声は、人間が自らその一部として所属する外部世界を表象しようとする試みであり、そのことを通して外部世界の客観的な把握、即ち概念を獲得したのである。音声を通して人は世界を理解し表現することが可能になった。このような音声の働きは、調音という身体的運動を通して、運動、変化として現われる外界の事象を表現するための一種の「隠喩」である。自然言語における隠喩のこのような本質的な働きを理解すれば我々は言語の変転の後を遡って原初的母音体系がどのように成り立ち、基幹的語彙がどのように形成されたか、その後を辿ることができるのではないか。そのような探索の可能性を日本語という一つの自然言語を通して調べてみた。

キーワード：四角母音体系、三角母音体系、多義性、隠喩、音声表象、上代特殊仮名遣い

### 1. 始めに

語の多義性は自然言語の本質的な性質であると考えられる。特定言語の語彙の集成としての辞書を開いてみると、語の様々な意味が通時的、あるいは共時的な意味の序列に配慮されて並べられているのを見ることができる。語の多義性とは言い換えれば一つの語の使用範囲が限定されていないということ、あらゆる方向に対して適用の可能性が開かれているということの結果である。

語の多義性は言語の通時的な発展の中で獲得されてきたものであるが、同時に語における不変の一貫した要素の存在を推測することもできる。なぜなら、語の分化した様々な意義は脈絡もなく、無秩序に発展したのではないことは明らかだからである。語義の発展において絶対的な断絶、或いは無からの創造はない。常に一本の絆があらゆる分化の飛躍を通して一貫してい

るのを推察することができる。名のない新しい事象に出会った時、人は既知の事象と結びつけてそれとの関連においてこの新しい事象を理解し、表現しようとする。その際に行われることは、この二つの事象の共通性を引き出して、それに基づいて表現するということである。言語的表現が達成できていない段階で、人がこのような共通性を把握するのはイメージを通してである。二つの事象の間にこのようなイメージの共有性が認められたら、それらの表面的な相違を超えて同じ一つの表現によってこの二つは結び付けられるのである。その際、古い事象を表す語が新しい事象に結び付けられ、一つの語義の発展がみられたことになる。言述のレベルにおいてこのような類似性の把握による理解の仕方は類比(アナロジー)と呼ぶことができるが、語のレベルにおいては隠喩(メタファー)と呼ばれる<sup>1)</sup>。語義の発展はこのような隠喩の積み重ねの結果に他ならない。語義の発展の可能性がいかなる限定も受けることなく常に開かれているということは、二つの事象間の共通性を把握し、この二つを結びつける仕方が、人間精神の自由な活動に委ねられているということである。「恣意性」ということが発生するのはこの点においてである。この「恣意性」という言葉は語の音声形態と意味の関連がいかなる必然性もなく慣習的に定められたものであるという意味で言語学において定着した考えである。確かに、二つの事象間の共通性の認識を通して語義を発展させることは想像力の自由に委ねられている。この点において「恣意性」を認めなければならない。然し一つの語義、または語は空無の中から人間精神によって作り出されるのではなく、それに先立つ語と語義との関連の中から生み出されるのである。語の歴史は過去に向かって途切れることなく遡っている。人間の歴史を通して連綿と連なっているこの糸を根源の方向に向かってたどって行く時、われわれは原初の音声に出会うはずである。言語の歴史の中で、隠喩として現れる精神の働きが言語に内在する本源的性質であるとすれば、この働きは原初的な音声の発出の際にも潜在していたに違いない。

音声は随意的な神経の支配下におかれた随意筋の活動に基づくものであるから、人間の意識

1) 人間の認知活動や言語の意味論におけるイメージや隠喩の重要性について論じた著書としてRicoeur 1975, Edie 1976, Johnson 1987などが挙げられるが、それらの議論をここで迎える暇はないので、それぞれの論点を代表する文を一つずつ引用することにしよう。「隠喩とは言葉を修飾するための単なる文体の文彩をはるかにこえたものです。隠喩は言語の創造性の、もっとも明瞭な表現なのです。」(Ricoeur 1975; 久米博訳1984: )「我々はここでもっぱら、長期の使用によって聖別されたために、かえってイメージを呼び起こす力を失い、そのようにしてもはや隠喩として気づかれることもなくなったもっとも基本的な隠喩を問題にする。そのような隠れた、あるいは根の隠喩は、多くのカテゴリーに分けることができる。言語にとって基本的な、それゆえ思考にとっても最も基本的な隠喩の代表的なものは、身体的諸過程の体験や知覚経験・感覚・生きられる空間・生きられる時間から派生したものである。」(Edie 1976; 滝浦静雄訳1980:247)「こうした還元主義的見解に反して、隠喩が人間的理解に浸透した、還元しえない、想像的構造であることの証拠はますます多く得られている。この構造が意味の本性に影響を及ぼし、われわれの理性的推論を制約するのである。」(Johnson 1987; 菅野、中村訳 1991:13)

的活動として現れる。そして、意識とは人間精神と世界との相互作用そのものであるから、音声には人間の世界との関わりが直接反映していたとしても不思議ではない。隠喩的作用による語義、語彙の拡大が精神と言語に内在する性質に基づくとすれば、このような原初的な音声の創造の中にもそれは働いていたと考えることができる。

人は意識的な存在であり、意識的な筋肉（随意筋）の活動によって世界に対し働きかけ、世界との間に相互作用が成立する。この相互作用は意識と無意識の中に記憶として保存されるであろう。保存されたものは表出、表現を求めるであろう。表出、表現も身体の活動であるから、当然随意筋が使用される。この目的のために最適なのが声帯の筋肉である。なぜなら、声帯の筋肉は、他の身体各部の随意筋とは違って、内部からの要求の求めに応じてのみ活動するものだからである。外部の世界に直接働きかけることはこの筋肉にはできない。この筋肉も随意筋であり、意識のコントロールに従う。発声の仕方を自由に意識的にコントロールすることができるのは人間のみである。このことが音声言語の基盤になっていることは疑いない。

しかし声帯の振動から発生する音波だけではかすかに聞こえる程度の小さな音声にしかならない。声として外部から聞こえる程度の大きさになるためには、声帯から口の出口に至る声道に含まれる空気が声帯の振動に共鳴して振動することが必要である。この声道における共鳴をも人は舌やその他の調音部位を自由に操ることによってコントロールすることができる。このことが母音と呼ばれる種類の音声が生産される基盤である。母音の生成において既に様々の調音部位は多様な動きの可能性を獲得している。この調音部位の動きを、声帯の振動から切り離し解放して、その動きに一層の自由を与えた時に子音と呼ばれる種類の音声生まれる<sup>2)</sup>。

母音の音声的実質である声帯の振動は、表現を求める内部の要求や情動と結びつきやすい。母音は持続的な楽音であり、外界の自然の中にはこういう性質の音は存在しない。これに対して子音は本質的に、瞬間的な噪音であり、自然界の物理的な音に近いものである。母音の発生源である声帯の筋肉は随意筋ではあるが、声を出すということ以外の機能は持っていない。それに対して、子音の調音器である口腔内の各部位は、本来声のために器官ではなく、食物摂取のための器官である。随意筋の常として身体と外界の事物の間に関わりの際に用いられる点は他の随意筋を備えた身体器官と同じである。手や足のような本来、外部世界に働きかけることを機能としている器官が、外界との交渉の記憶をもとに、身振りによって、外界の事象や、相

2) このような記述の仕方は抽象化、理念化し過ぎているかもしれない。幼児の音韻獲得の過程において、子音プラス母音の構造を備えた音節が喃語において確立する以前に、母音のみの音節が現れ、一般にこれは「過度的な喃語」として認められている（小林、佐々木 1997: 57）。しかし実際には、母音体系を習得した後に子音体系の習得が始まるのではないことは明らかである（例えば、Jakobson 2004などを参照）。この二つはある程度は並行して、相互作用的に進行するのであろう。また、よく知られた、喃語期に先立つ時期における多彩な音声の自由な発出（これは後に単語の発出が始まるころには消失する）は、音韻の獲得が必ずしも常に意識のコントロール下で行われるのではないことを暗示している。言語能力と意識の二つもまたどちらか一方が先行、主導するわけではなく、やはり相互作用的に発展するのであろう。

相互作用の状況を、再現し、表現しようとするところがあるのと同じように、子音の調音の際に、調音器官が、調音の位置をとって筋肉を緊張させるとき、手足のような外部の身体器官による身振り（ジェスチャー）による意味作用が、調音器官の動きの背後に寄り添うことがあるとしても不思議ではないと思われる<sup>3)</sup>。

母音と子音は一般的に対立的な概念として考えられることが多いが、連続している要素もある。子音の調音において中心的な役割を持つ舌、唇、顎関節などは、母音においても、違った様式においてではあるがやはり中心的な働きを担っている。声帯の振動は母音の原材料であって、これが声道において調音器官によってさまざまな加工を受けて母音のそれぞれの音色が分化する。その際、同じ器官を用いて行われる母音の調音と子音のそれが断絶していないと考えるのが自然であろう。どちらの場合も調音器官の動きには、身体的な身振りの反映が入り込む余地がある。しかし両者の間には画然とした発音方法の差はあるので、表現の対象、質において何らかの差異があっても不思議ではない。

身振りは事象そのものではなく、事象の再現、表現の試みである。その表現によって目標の事象がイメージすることができれば目的は達成される。この二つを結びつける絆となっているのは、両者の間の動きや形などの共通性である。このようにあるものを他の全く異なったものによって置き換え、表現するということは、まさに語の使用における隠喩の働きと同じである。語の増殖と語義の発展において隠喩という思考形態が本質的な役割を担っているとすれば、ここにその本源を見ることができであろう。

「言語は化石となった詩である。」これはある詩人が言語の本質を洞察して述べた言葉であるが<sup>4)</sup>、詩は言語を用いて作るものという皮相的な通念から見れば、非常に逆説的な言葉に見えるであろう。しかし以上に述べたような言語における隠喩の働きを考えれば、当然な、自然な考えの表明であるということが理解できる。この言葉はまた、言語の本性と本源を探求しようとする者にとって励ましとなる言葉である。なぜなら言語はそれ自体、化石であり、この化石を注意深く観察すれば探求を進めるため手掛かりになることを意味しているからである。そうはいってもそのようなことは不可能なことのように見える。世界の言語はバベルの神話が語っているように、極度に分裂した状態であり、それぞれが長い歴史の経過の中で分化と変化を積み重ねてきた結果が現在の状態である。その中には印欧語のように、過去の資料に恵まれて、分化と変遷の後をかなり遠い過去にまで遡ることができる言語も存在する。このような言語の場合、現在生きている言語の状態は数百年、あるいは数千年遡ると、もはや存在していないことが明らかにされている。この間の変化の跡がかなりの程度に分かるから、同じような程

3) 幼児の音韻獲得過程における身振りや手足の運動の重要性については注目されることが少ないが、喃語出現期以前の、発音に同期する手足のリズミカルな動きや、一語発話期前後に見られる表象的身振りなどは注目に値することである（小林、佐々木 1997:55-56など参照）。もっとも幼児の言語獲得と言語創生期における言語の発展とでは状況、条件が違うので安易な類推は避けるべきである。

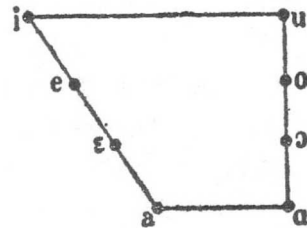
4) Emerson (1906) の *Poet* と題するエッセイの中に含まれている言葉である。“Language is fossil poetry.”

度の変化の可能性をさらに過去に向かって想定しなければならない。そのような言語の場合、後世に残っている言語の状態は、言語の本源にできる限り遠く遡りたいという場合、「化石」としての価値は低くなることは当然である。必要なのはもっと変化の少ない言語、言い換えれば音声体系が、時の流れの中で比較的安定していて、それと並行して意味変化の跡がある程度推測できる程度に辿ることのできる可能性が残っているような言語である。そのような可能性のある言語として日本語を考えてみたい。その可能性を窺わせる理由として次のような点を挙げることができる。

1. 資料によって確認できる歴史時代に関する限り音声体系の変化がないわけではないが、比較的安定しているということができる。印欧語にしばしば見られるような広範囲な音声推移は見られない。限定された範囲内で見られる音声変化も、他の諸言語においてもみられるような普遍性のある変化であるから、その変化の跡をたどることは難しくはない。
2. いわゆる「上代特殊仮名遣い」の説によって示唆された「8母音説」は、1. で述べた条件には合わないように見えるかも知れない。しかしこの「8母音説」は確定した定説というにはほど遠いというのが現状であり、松本（1975）以後は全面的な見直しが必要な状況になっている。しかし議論は行き詰っているというのが現状である。
3. 音声体系のみでなく、語彙の体系においても安定性がみられる。基礎的語彙について言うなら、その大きな部分は、資料がさかのぼることのできる限りの過去から現在に至るまで、語形と語義を大きく変えることなく保存されている。
4. 外来の要素も多く取り入れられているが、歴史時代に限って言えば、固有要素と外来要素の区別は概して画然としており、日本語話者の意識の中でもその区別は多くの場合保持されてきたといってもいいであろう。文字を介在させていない歴史時代以前については多少の議論の余地が存している場合もある。
5. 日本語の系統の問題は百年間も議論が行われてきたが、いまだに解決の見通しは全く立っていない。これは外に向かって過去を求める立場であるが、外ではなく、内に向かってどれだけ起源に向かって遡ることができるかという可能性を追求する道もあるのではないだろうか。

## 2. 母音体系のモデル

母音体系のモデルとしてもっともよく知られているのはDaniel Jonesによる基本母音図である。最初に発表された第一次基本母音の八つの母音（i, e, ε, a, u, o, ɔ, ɒ）が台形の四つの辺に沿って配置された図は音声学の教科書などで馴染み深いものである（第1図）。ここで用いた八つの国際音声字母（IPA）は諸言語の母音を表記する目的で用いられているもので実際の音声転写を目的としている。しかしJonesの基本母音は母音表記の基準を定めることが目的であるから、基準となるべき極限的位



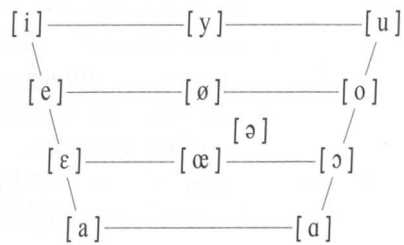
第1図 第一次基本母音

置を定めることからスタートしている。台形の左上（台形の左側は口の開口部を、右側は咽頭に面する部分を表している）に置かれた [i] は、舌を、できるだけ前にして、母音性を失わない範囲で出来るだけ上に上げて発する音と定義されている。その対蹠点の右下に置かれた [a] は舌をできるだけ低く、できるだけ後ろ寄りに置いて発する、円唇性はない母音と定義されている。この二つの基準点を定めた後、前舌性の三つの母音 [e, ε, a] と後舌性の三つ [ɔ, o, u] は、それぞれの間の聴覚的間隔が等しくなるように、それぞれ台形の左辺と右辺に配置されている。あとから追加された第二次基本母音とともにIPA制定の基盤になっている。IPAが諸言語の音声表記のための道具として広く普及し、用いられているのは、Jonesの母音モデルが明確な分かりやすい母音の基準点を示しているためである。母音に較べて子音は調音点、調音方法が明確で、観察しやすいために、子音の記述のほうが母音のそれに較べると容易で、問題点が少ない。Jonesの功績は母音の記述を容易にするための基準点を示したことである。これらの基準点は母音の存在領域を区切るための限界点を示していて、すべての母音はこれらの基準点からの距離によって、この「母音空間」の中にその位置を定めることが可能になった。このような「母音空間」を想定するという事は、母音を物理的実体と考えれば、母音について科学的、客観的な記述が可能になるという大きな利点がある。しかし、言語音は空気の波動であるという点で確かに物理的実体であることは確かではあるが、それが人間の精神的活動の所産として発出するものであり、また人間精神によって受け止められて初めて意味をもつものであることを考えれば、音声を単に物理的実体としてみなすことには矛盾が内包することが予想される。事実、Jones自身の記述の中にそのような矛盾を窺わせる要素を見出すことができる。例えば、前舌母音 [i, e, ε] に関しては、その音色の差異は「舌の位置の違いによって主に生み出されるのであって、唇の位置の差異はほとんど影響がない」と言っているのに対して、後舌母音 [ɔ, o, u] に対しては、「舌の位置と、唇の位置が相伴って音色の差異を作っている」と述べている (Jones 1972:34)。また、このことが原因となって「後舌母音間の舌の位置の間隔が前舌母音の場合より狭くなっている」とも述べている。音声という物理的実体を収容するための空間として「母音空間」を設定したのであれば、本来対称的なものであるはずの空間に、なぜこのような差異が出現するのであろうか。後舌母音に関するこの「舌の位置」とはいわゆる「円唇性」(roundness) のことを言っているのであるが、「円唇性」とはいったい何なのか、なぜそれは後舌母音に対してだけ、そのように作用を及ぼすのであろうか。このような点についてJonesはなにも述べていないのである<sup>5)</sup>。Jonesの第一次基本母音は母音空間の極限点を定

5) この点に関しては、Radifoged (2006:217) は唇の位置の上下 (high - low)、前後 (front - back)、円唇性平唇性 (rounded - spread) の三つの軸をとった三次元モデルを提出している。Jonesのモデルは上下と前後だけの二次元モデルである。だから円唇性を取り入れたことがとって付けたような唐突な感じを与えている (服部1951:73もこの点を指摘している)。Radifogedのモデルは唇の形を完全に変数として取り込んでいるという点でJonesのモデルを凌ぐ完成されたモデルである。しかし、唇の形という人間の恣意性にのみ依存した要素を、空間内の位置という物理的要素と全く同列に置いたという点で、Jonesの矛盾を一層先鋭化しているとも見える。

めたものであるから、母音の存在の可能性の限界を示しているということができる。これらの八つの基本母音をすべて音韻体系の中に含んでいる言語が存在しても不思議ではない。そのような言語は、母音空間を最大限に利用しているということができる。母音空間の利用の仕方について考える場合、その中に含まれる母音の数が決まると、それらの母音は限定された空間の内部で、分散して、互いの間隔が最大になるような点に落ち着いて、それぞれの位置を占めるであろう。そのような分散の仕方をした場合に聴覚的な識別の効率が最大になるであろう。コンピューターの迅速な計算能力を利用すれば、母音の配置についてのこのようなシミュレーションを行うことが可能である。シミュレーションの結果と現実の言語の母音体系を比較する研究も盛んになされている。コンピューターシミュレーションによる研究の代表的なものとして、Linjencrants & Lindblom (1972)、Bart de Boer (2001) などが挙げられる<sup>6)</sup>。また、Crothers (1978:125-136) と Maddieson (1984:136-154) は、前者はStanford Phonology Archiving Project (SPA)、後者はUCLA Phonological Segment Inventory Database (UPSID) に集積された資料にそれぞれ基づいて、世界の諸言語の母音体系のパターンを集計、研究しているが、どちらも、L&L (1972) の提唱した母音空間内の最適分散理論に基づくヴァチュアルな母音パターンと現実の言語に現われる母音パターンを比較することによって、母音体系におけるなんらかの普遍的なものを引き出そうと試みている。その結果、二人とも、これら両者の間に高い程度の一致が見られることから、このような研究方法の有意義性と将来性を結論づけている。

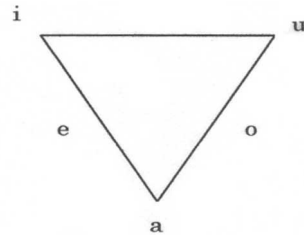
Crothers (1978) と Maddieson (1984) はそれぞれ異なったデータベースに依拠して諸言語に現われている母音体系のパターンを分類して統計的に示している。両者が一致して示していることは、もっとも頻繁に現れるパターンは5母音体系 [i, ε, a, ɔ, u] であるということである。ところが、5母音体系がなぜ特に好まれるのかということは、説明できないのである。母音分散理論に基づいたシミュレーションによっても、母音が五つの場合はこの組み合わせになる確率が高いということは言えるが、5という数が最適の数であるかどうかについては何も言えないのである<sup>7)</sup>。Jonesの第一次基本母音の八つの母音は母音空間の限界線上にあるものであるから、これらをすべてもっている母音体系は、母音空間を最大限に活用しているといえる。例えばフランス語の母音体系はこれらの8母音を含めて12の母音がある(鼻母音は除いて)(第2図)。Maddiesonの集計



第2図 フランス語の母音体系

- 6) これらの研究においては、上の部分で述べたような調音点に基づいた現実的な空間ではなく、各母音の二つ、又は三つの主要フォルマントを用いた二次元座標上の抽象的な空間内の母音の配置を扱っている。
- 7) de Boer (2001:103) のシミュレーションによれば、人為的な条件のもとで、最も高い頻度で出現するのは5母音体系ではなく4母音体系であることは興味深い。

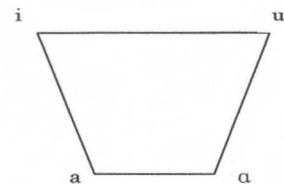
によれば、11種類以上の母音をもつ言語は全部合わせても全体の2.4%に過ぎない。これに対し5母音体系は30.9%を占めている。このことから、フランス語や第一次基本母音のような4角形の各頂点に母音が配置されたような、母音空間を隅々まで利用した母音体系は非常に例外的な少数派の体系であることがわかる。一方、5母音体系は、広母音としては一つだけの[a]を頂点に置いた逆三角形の母音図で示される。この三角形の上辺は狭母音の位置を表し



第3図 五母音体系

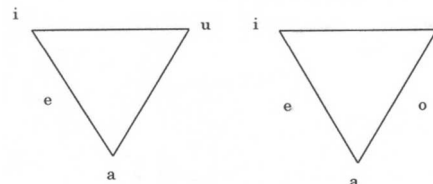
[i]と[u]が左右の頂点に配される。残りの[e]と[o](または[ε]と[ο])は左右の斜辺上に置かれる(第3図)。ところでこのような三角形に図示されるのが適当な体系は5母音体系だけでなく、[i, a, u]の三つの母音を含んでいて、それらが三つの頂点を占めるような体系はすべて母音三角形に図示することができる。4母音体系の約半数がそのようなものである。5母音以上の体系の場合は、舌位が上下三段階か四段階か(例えば、i, e, aかi, e, ε, aか)の別はあっても、三角形上の配置に加えて、中舌母音を三角形の中心部に増やすというのが一般的パターンである。第一次基本母音的な四角形体系が現れるのは10母音以上の体系においてである。その場合は、母音空間の中間部に必ずいくつかの中舌的母音が出現する。しかし、母音空間の利用と開発を推し進めたこのような母音体系は、Maddiesonの集計によれば、全体の約8%にすぎないのである(これは母音数10以上の言語の割合、Maddieson1984:127)。残りの約92%は、三角形体系とでもいうべきものである。

Maddieson(1984:127)によると、4母音体系言語は全体の8.5%、3母音体系の5.4%よりも多い。4母音体系について興味深いことは、母音空間の有効な利用と、母音の位置のバランスから考えると、四角形の四隅に母音を配置してバランスのとれた[i, a, ɑ, u]の体系が最もありそうに見えるのだが、実際にはこのパターンはほとんど現われない(第4図)。渡部(1996)によるUPSIDの分析結果をみると4母音体系はすべて三角形パターンである(渡部1996:113-116)(第5図はその中の二つの例)。またこのパターンの中でも、三角形の中央部に一つの母音を置くと非常にバランスのいい配置になるのであるが、不思議なことにこのようなパターンは回避されている。渡部



第4図 四母音体系

(1996)によると4母音体系30例のうち[ə]を三角形の中央に配置したものは例外的に2例しか存しない。5母音体系の場合も、[i, a, ɑ, u]の4角形の中央に中舌母音を一つ置いた対称性の高い体系があってもよさそうなのであるが、実際にはそのような四角体系は存在しない。



第5図 三角形の四母音体系

母音体系の研究者たちは一様に母音分散理論



を信奉している。母音体系を物理的にのみ捉えようとする、このようなアプローチが合理的であり、事実このアプローチによって説明できることや、この理論に合致していることも多いのである。しかし上で指摘したように、この理論では説明が付きにくいこともある。もう一つこの理論から逸脱している興味深い点について考えてみたい。

/a, i, u/という三つの母音の組み合わせは、一般に母音体系の基本的なパターンとみなされている。これは最小の組み合わせでもあるし<sup>8)</sup>、Maddieson (1984) の母音出現頻度の調査でも、/i/ (91.5%)、/a/ (88.0%)、/u/ (83.9%) というように、他の母音を圧して出現頻度が高いという点からこの三つの母音が特権的な性格のものと考えられることが多い。Crothers (1978: 115) なども「すべての言語は/i, a, u/をもつ」を言語普遍則として掲げている(/u/を欠く言語があるのは事実であるが、その場合はCrothersは、/u/の近辺にある/w/や/o/を/u/に相当する音韻とみなして強いてこの一般則を守ろうとしている)。しかし、上に掲げた出現頻度を比較しても、/u/が三母音の中では頻度が劣るのは明らかである。/u/の欠落について追及しているMaddiesonの議論を追ってみることにする。

母音分散理論が要請するような均整のとれた母音分散パターンをとっていない言語が、UPSIDの317の全サンプル言語のなかで、43例存在している(13.6%)(彼はこれを欠陥体系と名付けている)。この43言語のうち母音の一つだけ欠いているものは35あるのだが、その約半分の体系には/u/がないのである。これに対して、/e/と/o/が欠けているのは、それぞれ9、と7に過ぎない。このことから次のような母音ランキングが成り立つことがわかる。

/a,i/>/e,o/>/u/

一般には、/a, i, u/の存在を前提として、二次的に/e, o/が出現するという母音序列が広く受け入れられていて、ほとんど定説のように見られている(/a/>/i/>/u/>/e/>/o/)。しかしこれは上の事実から見て必ずしも正しくないことが分かる。母音空間の適正分割という考え方からすれば[u]という母音は不可欠な、安定した場所を与えられているように見えるが、事実はそうではないということを確認しなければならない。[u]は[a]や[i]と同じ資格で基本母音ということはできないかも知れないという可能性をここで念頭に置いておかねばならない。このことは後で5母音体系や、日本語の母音体系の成立について考えるときに重要な関わりをもつからである。

Maddiesonの分析には更に興味深い問題点が含まれているので彼の議論をもう少し追ってみよう。上で述べたように、標準的な母音配置に、一つまたは二つの母音が欠落しているような体系が見出される。それらの欠落はそのまま空白部分が埋められずに残っている場合もあるが、多くの場合は他の、近縁性のある母音によって空白部が補填される。そのような補填の一つのケースとして日本語の場合も挙げられている。日本語の母音組織には、[u]は存在しない。一般的な5母音体系における[u]の代替として日本語は[ウ]をもっている。[ウ]は円唇後舌狭母音の[u]とは違って非円唇中舌の狭母音である。[ウ]に対してMaddiesonは[ɯ]を充

8) 2母音体系も報告されているが、これについては議論もあるし、非常に例外的な数でもあるからここでは無視しておく。

ている<sup>9)</sup>。これには問題もあるが非円唇、または弱円唇の狭母音の変異形（ヴァリエント）を一括して[ɯ]で表すことは一理あるからこれに従うことにしよう。さてMaddiesonによれば、欠落した[u]を補充するのに、（欠落した母音が一つだけの場合は）[ɯ]をもってすることが一般的である。ところが、欠落母音が二つの場合、例えば[e]と[u]が欠落している場合（[i]が欠けることはない、また[a]が欠けることも稀である）、その場合は補充されるのは[u]の方であって[e]ではない。[u]が[ɯ]で置き換えられるのである。[e]の方は欠けたままである。これは前のページで確認した母音序列の原則に反している。つまり、[e]や[o]より先に[u]が欠けるはずなのに（[u]が序列の最下位だから）[e]が先に欠けているからである。「驚くべきこと」とMaddiesonはコメントしている。このように[ɯ]が補填母音として他に優先して現れるというのは「予期せぬこと（これもMaddieson1984:146の評言）」なのであるが、[ɯ]に関してもう一つ特異な事実がある。母音空間において第一次基本母音の内側に配置されている第二次基本母音は、特定の音韻体系において、第一次基本体系に属する対応母音の存在を前提にしている。例えば、[i]と[u]があらかじめ存在していなければ[y]は存在しえないのであるが、[y]と同様に[i]と[u]の中間性を帯びた音響特性をもつ[ɯ]も本来は、[i]と[u]の存在を前提とするはずなのであるが、代替母音として登場するとき、[ɯ]はそのような原則を無視して単独で現れるのが常なのである。「後舌狭母音[u]が割り当てられているはずの母音空間の隅の場所は、我々が予期しているよりも、聴覚的には、狭いのかもしれない。そのために、中舌的な[ɯ][i][ɯ]は、音響学的データが示しているより以上に、知覚的には接近しているのかもしれない。」このMaddiesonの結論の上に立ってさらに推論を推し進めてみたい。

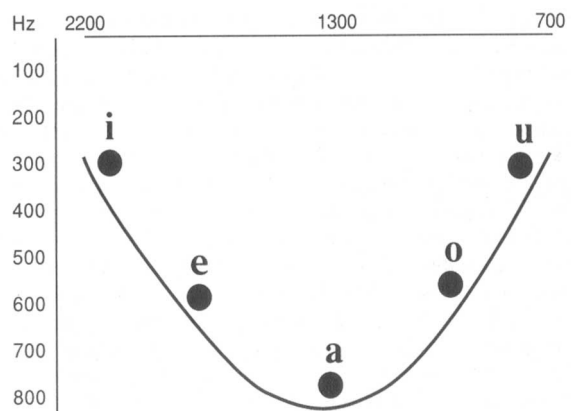
円唇後舌狭母音の[u]は、第一次基本母音の四角形空間においても、/a, i, u/を頂点とする母音三角形においても、右上のコーナーにその本来の位置を与えられて、普遍的な母音音素の一つとして確固とした地位を占めているように見える。しかし上で検討してきたような様々な母音配置パターンの現れ方をよく見ると、この母音は、理論的に予期されているよりは、言語実体としての現実性が希薄な母音ではないかと思われてくる。これはこの母音自体の素性の問題であるだけでなく、母音空間の分割という機械論的思考方法に問題があるのであって、言語の現実と理論的モデルの間の齟齬が現れたのだと考えるべきであろう。この理論的モデルは多くの言語の現実と合致しているし、多くの言語の現象がこれによって説明できるために、合致しない少数の事象は例外として処理されやすい。そこで問題は、この例外的な事象の中から、生きている言語の現実に立脚した別のモデルを見出すことができるかどうかということになるであろう。

9) 日本語の[ウ]に対して[ɯ]のIPAがしばしば充てられるが、IPAの定義では[ɯ]は非円唇の後舌母音を表しているので[ウ]のような中舌母音に対しては正確に対応していない。しかしMaddieson(1984:147)の報告している[ɯ]の分析結果を見ると、他の言語の場合でも[ɯ]で表記されている音声には中舌的なものがあるようである。なお日本語でも琉球方言や他の方言においては[u]に近い後舌的な[ウ]も見られる。

### 3. 三角形の5母音体系

/i, (ɛ) a, (ɔ) u/の五母音からなる母音体系が、諸言語の母音体系パターンの中でも最も頻度の高いものであることはよく知られている。そして日本語の5母音体系もスペイン語の5母音体系などと並べられて、最も普遍的な5母音体系の例として示されることが音声学の本などでよく見かける。その際、5母音の配置図として、逆三角形の母音図が提示されるのが常である(第3図)。この母音三角形は、本来、調音的な観点から、舌の最高位置が口内空間において占める位置に基づいて描かれたものである。/a/は開口度が一番大きく舌は低い位置にあるので三角形の下の頂点を占める。/i/は、舌が硬口蓋の前方に接近して一番高い位置にあって、三角形の左の角を占める。/u/は、舌の後部が軟口蓋に接近した位置にあって、三角形の右の角を占める。音響学的にこの三角形を描くこともできる。各母音の音色はそれぞれの固有の共鳴周波数(フォルマント)の組み合わせによって決まるが、そのうち最初の二つ(F1, F2)が決定的に重要である。このF1とF2の数値を二次元座標上にプロットすると、調音的に描いた三角形に近い形を描くことができる。いずれの方法によっても三つの母音は互いの間の間隔が最大になるように配置される。このことは、各母音が声道内でとっている舌の最高位置を比較してもわかるし、また、F1とF2の組み合わせを比較してもわかる。スペイン語の母音を例にとると、[i]のF1周波数は約300であり、F2は約2200である。これに対し、[u]の場合は、F1は約300で[i]にほぼ等しい。F2は約700で横軸のF2軸上の[i]からの距離が大きく開く結果になっている。[a]はどうかというと、F2軸上では[i]と[u]のほぼ中間にあたる約1300のところであり、F1は[i][u]の双方から距離をあけて約800である(以上のデータはLadefoged 2001:42による)。残りの[e]と[o]はそれぞれ[a]と[i][a]と[u]の中間に位置する(第6図)。このような三角形の母音配置についてLadefoged(2001:35)は次のように述べている。「三つの母音a, i, uは聴覚的に最大限に異なっているため、語の区別をするために非常に効果的であるから多くの言語はこれらを用いている。もし進化的な観点から言語について考えるなら、抜群に多くの言語が、スペイン語の三つの母音a, i, uと同様な母音をもつように進化したということは驚くに当たらない。これら三つの母音はコミュニケーションのための非常に効果的な手段を提供するからである。」

確かに言語にはコミュニケーションの手段という側面が強調されやすい機能があるし、そういう側面を強化するように進化してきたというのも事実であろう。しかしもしそうな



第6図 スペイン語母音の第1、第2フォルマント図(Ladefoged 2001:42より転載、縦軸はF1、横軸はF2を表す。)

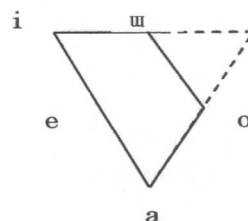
らなぜ、三角母音体系でなく四角母音体系をもっと多くの言語が採用していないのか不可思議である。なぜなら、三角体系より四角体系の方が、前節において指摘したように、母音空間を最大限に利用して、より多くの母音を収容することができ、伝達の目的のためにはより優れたシステムであると考えられるからである。しかし実際にはこれを採用しているのは西ヨーロッパのいくつかの言語を含めて世界でもごく少数に過ぎない。更にまた、もし伝達効率を絶対的の目的として諸言語の音声体系が発達したのだとすれば、前節で指摘したような、三角体系の一角を占める [u] の欠落とか、[ɯ] による [u] の置換というような現象がなぜ生じるのであろうか。このような一見例外的にみえる現象を理解するためには、言語の生成と発達の根底には、伝達という目的以外の原理が働いていることを考えてみなければならないであろう。

#### 4 . 日本語の 5 母音体系と a-u 軸

日本語の [ウ] はローマ字表記されるときは、u の文字で表わされるから、[u] の音声との違いを日本語話者たちは普通意識することはない。[u] は開口部が小さな円形を形作るように唇をすぼめるのだが、その動きは唇の突出を伴う。この唇の突出によって歯の前方に生まれた空間によって、声道が少し延長される。声道が伸びたことによって [u] 独特の低いピッチの声になるが、これは F2 周波数の低い値となって現れる。舌の後部は上にあげられて声道を狭める。この狭めによって F1 周波数が低くなっているのは [i] の場合の同じである。日本語の [ウ] /u/ は唇と後舌部において、筋肉の緊張を伴う動きがほとんど見られないという点で [u] と異なる。従って IPA の [u] をこの音に充てるのは適切ではない。[ɯ] を用いることにも問題はあがあるが慣行に従うことにする。音響学的にも [ɯ] は [u] との相違が現れる。円唇性がないということと、後舌部による狭めがないということにより、[u] より口腔前部が短くなることにより F2 周波数が増加し、F2 軸上で [a] とほぼ同じ領域に位置する。即ち [u] のような後舌母音ではなく中舌母音としての性格を現わすのである。このことは、[a] と [ɯ] が同一の軸上に対称的な位置を占めているということの意味している。[a] と [ɯ] が同一のカテゴリーの枠の中にあるということは、調音方法を比較しても分かることである。顎関節の開閉という唯一の対立がこの二つの母音を区分しているのである。唇や舌にいかなる作為的な緊張をも与えることなく、自然な位置のまま顎関節を最大限に向けて開けた状態が [a] の調音である。逆に、声の発出を閉ざさない程度に顎関節を最大限の閉鎖に近づけた状態が [ɯ] の調音である。顎関節の開閉の代わりに、口腔内の空間に着目して [a] - [ɯ] の対照性を描くこともできる。口腔内の空間が最大になるような動きの表現が [a] であり、逆に最小になるような動きの表現が [ɯ] であるということが出来る。このような口の開閉運動は作為と技巧をほとんど必要としないものであるから、この二つの母音が言語音声の発達において初期的な段階を代表するとしても不思議ではないであろう。また、幼児が言語音獲得のとは口において、この二つの母音と、口を完全に閉鎖した状態から発せられる子音、唇閉鎖音の組み合わせが初期の喃語において先ず現われるということは偶然ではないであろう。

/a, i, u/ の三母音が、母音空間内において、三角形の各頂点に位置するように配置された母音

体系は各母音の知覚印象が最も際立って区別されるためにコミュニケーションの手段として音声を考える場合には最も有利なシステムである。これに対して、日本語におけるように [u] の代わりに [ɯ] が配置された体系においては、三角形配置は解消されて、三つの母音による均等な母音空間の分割はもはやない (第7図)。この母音体系は伝達の効率化を求めるとい方向に進化しなかったということが考えられる。伝達の効率化という一面的な観点では母音体系の諸種のパターンの間に見られる揺れの現象を理解することができないことをすでに指摘した。日本語のような母音空間の均等分割を一見犠牲にしているような母音配置において何が保持されているのであろうか。



第7図 日本語の5母音体系

不均等な配置が生じているのは [a] と [ɯ] という二つの母音が共通軸上において分化成立していることに由来している。この二つの対照的な母音の調音方法は空間の変化についての二つのパターンのイメージが結びついている。即ち空間の肯定、拡大のイメージと否定、縮小という相反する二つのイメージである。二つの母音の音色のコントラストは、機械的に母音空間の分割を最適にするために産み出されるのではない。これらのイメージをより鮮明なものにしようとする努力の結果として産み出されるのである。これら二つの母音のコントラストを作り出すために、顎の開閉運動が決定的に重要な役割をしているのは確かである。下顎を下げることにより開口部が開き、口の中の空間が拡大される。このとき声を発すると [a] のような音声が出る。しかし漠然と口をあけて音声を発するのと、[a] という音声を意図して発生するのとでは違いがある。その場合は、たんに顎の下降により開口度を上げるだけでなく、唇も舌も [a] という目標に向かって協力して筋肉の微妙な調整を加える。そうすることによって始めて核心を得た [a] が発せられるのである。この「核心」が実在しなければ [a] の統一像が存在しないことになるであろう。この統一像が存在するから各人の発音は多少のずれを伴いながらもそれを目指すことによって統一的な相互一致が得られるのである。各母音の音色は、F1とF2周波数によってほぼ決定される。だからF1とF2の周波数を組み合わせて人工的に、音色を識別できる程度の母音を合成することもできる。しかしフォルマント周波数も、誤解されていることが多いのだが、舌の最高位置とか、声道の狭窄部とか、声道の長さとか、調音器官の特定の条件によって決定されるわけではない。この点について音響音声学者自身の言を借りることにしよう。「構音とフォルマントの関係については多くの知見が得られてきた。このような研究を通じて、フォルマント周波数は必ずしも共鳴腔の一定の形状に対応するものではないことが明らかになり、結局フォルマントというものは音源に対する声道全体としての音響効果の現れとして理解されるようになった (Borden et al 2003; 広瀬訳 2005:92)。」この音響音声学者の言っていることは、フォルマント周波数やその組み合わせを決定しているのは、すべての調音部位の作用の総合であるということである。しかしこの学者が言っていない重要なことがある。それは何がそのような総合を可能にしているのかということである。

ある母音の調音を完成するために、副次的な調音部位が協力して最後の仕上げをしたり、ある部位が十分機能できないような事態があれば他の部位がそれを補償して、全体として何の欠陥も残さないというようなことが可能であるのは、調音運動が全体として一つの目標を目指しているからである。生物的運動は機械的運動とは違って、何らかの目標を目指す。調音運動の場合、その目標とは、他の音素との対立、差異とか音素空間の配分といったような、機械的で、ネガティブなものではなく、調音運動の全体を、客観的外部世界の絶えざる流動と変化を伴う事象と結びつけようとするポジティブな意志に基づいている。言語音声はこのように出発点において既に表象性をもっている。身体的な器官の動きによって外界の事象が表象されるということは、言語音声それ自体が既に隠喩であることを意味している。隠喩とはある形態がその本来の機能とはかけ離れた機能を、想像力の働きを介して何らかの連結路を見出すことによって獲得することである。

限定された空間の存在や、その空間が拡大したり、縮小したりするような事象を、人は現実世界における経験の中で認識することがあるであろう。その様な認識は「ア」とか「ウ」という音声表現によってでなければ表象されることはなかったであろう。逆にそのような音声の獲得によってそのような事象の認識が深化されたということもあったであろう。

以上のように、[a]と[ɯ]という同一軸上に形成された相反する性格をもった母音が日本語の母音体系の一つの柱であることを指摘した。この指摘は現代日本語の母音体系を出発点としているという点で、原初体系にどう結びくのかという疑問が出てくるのは当然である。この点を確認するためには、これらの母音が体現している表象が、固有日本語の基幹的語彙の中にどのように現れているかを検証しなければならないがそれは後章に譲ることにして、ここではこの二つの母音の調音の仕方が、種々の母音の中でも特に自然で楽な、筋肉の特別な緊張を必要としないものであることから考えても、またこの調音様式と不可分に結びついているこの二つの母音の表象作用の一貫性から考えても、通時的な変化を経た結果であると考えよりは、むしろ原初的な姿をそのまま残した結果と考える方が理にかなっているという点だけを指摘しておく<sup>10)</sup>。

10) この点について音声学者による観察の結果を引用しておく。「/a/は日本語母音の中でもっとも基本的な母音となっている。基本的な母音とは次のような意味である。閉口時の調音姿態をそのままに、軟口蓋後端を咽頭壁に密着させ、口を大きく開くだけでその音声を得られるということである。言い換えれば特徴的な調音運動をほとんど必要としない、無理のない調音姿態で発することのできる母音ということでもある。日本人幼児の言語習得に際して、もっとも早い時期に獲得する母音がこの/a/であることから、無理のない調音姿態という意味が理解できよう。次に、/a/に近似した調音姿態を有する母音として/u/があった。/u/は/a/の調音姿態から、顎角を狭めることでその音を得られた母音である。欧米語の/u/とは違った平唇中舌の音 [ɯ+] で調音されている。言語習得期の幼児では、/a/についてこの母音を習得しており、/a/-/u/の母音連続を調音しようとする運動を/i/や/e/の習得以前に観察することができる。」(城生2001:69)

## 5. 日本語母音体系におけるo-i軸

さて日本語の5母音体系の中で、アとウについては体系内の位置を与えることができた。残りの三つのうちエについては、5母音体系の中で他とは異なった特異な性格を持っていることは明らかで、研究者たちの意見もこの点ではほぼ一致している。第一に、固有日本語の基幹的語彙の中でこの母音が出現する頻度が他の母音と比べて格段に小さいという点<sup>11)</sup>。第二に、第一点のような事態が発生した理由として当然考えられるのは、この母音が日本語の母音体系の中にあとから遅れて入ってきたということである。この点に関して、いわゆる「上代特殊仮名遣い」についての考察の中で、松本(1995:49)は歴史時代からそう遠ざからない時期と想定している。しかし、木田(1988:104-106)はエの起源についてもっと古い時期を考えている。木村(2003:52)は、この母音は言語の通常的使用においては表面に現れることは少ないが、もっと古い、特殊な役割を日本語の母音体系の中で担っていた可能性のあることを指摘している。

このように/e/の起源については考えるべき問題があるが、他の母音との相関関係において考える必要があるから後に回すことにして、差し当たってはa-u軸と対になって日本語の母音体系を構成するもう一つの軸をo-i軸と想定して、これについて考えてみたい。/i/については、その音価の安定性、諸言語の母音体系において占める普遍的な地位などについて、ほとんど疑問点はないと言っていいであろう。逆に/o/については明らかにすべき問題点が非常に多い。

まず、円唇性の問題について。母音三角形の右上の位置(これは口内の空間でいえば、舌の後部を上にあげた位置であるが)に置かれた[u]の調音において円唇性はもっとも完成すると一般に見なされている。つまり上下唇で囲まれる空間は最も小さく、もっとも円形に近いという点が基準とされているのである。このような見方をすると、三角形の下の頂点の[a]と[u]の中間に位置づけられた[o]や[ɔ]は未完成の円唇性を備えた中間的な性格の音声と見なされることになる。事実[o]や[ɔ]を発音してみると確かに[u]より低い、中間的な高さに舌の後部を上げて不自然なこともなくこれらの音声を発することができるから、これで何も問題はないように見える。音声学の教科書などでも何の疑問も抱くことなくこのように記述されている。まるで[u]が存在しなければ[o, ɔ]も存在せず、[u]の円唇性がなければ[o, ɔ]の円唇性もないかのようである。

日本語の母音体系の一つの基軸として/a/-/u/軸の存在を指摘した。日本語の[ɯ]は非円唇性であり、この軸においては円唇性は全く関わらない。従って日本語の体系においては、/o/の円唇性は/u/とは無関係であり、/o/に固有の性質であると考えなければならない。ここでもう一つの母音構成軸である/a/-/u/軸について考えたことを想起してみると、[a]という音声を出すときの口の形状は現象世界における類似、相似の事象を象徴、表象することを目標とした調音運動に基づいている。[a]という音声はそのような表象と常に結びついている。口は生命体

11)「日本書紀」の総音節集計によるとe, e1, e2が含まれる音節数の合計は全体の8.3%である(木田1988:61)。また「万葉集」においては同じく全体の9.1%となっている(大野1977:187)。

の開口部に過ぎない。生命体の内部には口腔と同様のあるいはもっと大きな空虚、あるいは空間が存在する。生物は環境から独立した存在ではないから、環境から生命体の内部に侵入してくるものがあるとその空間は減少、あるいは消去される。例えば食物を取り入れたような場合である。このような空間の消長は、生命体内においても、自然の現象界においても常に見られることであるが、言語音/a/と/u/はその調音運動における形態を通して、一切のこれらの現象、事象を表象する可能性をもっているのである。

さて、/o/の対蹠者である/i/の方は(/a/と並んで)、変化、動揺を被ることの少ない音声であるから、これを基準に/o/について考えるのが適当であろう。諸言語における/i/は第一次基本母音 [i] から大きく離れることはない。基本母音 [i] の特徴は大なり小なり保持される。共通の特徴は次のようである。舌の前面を上昇させ硬口蓋前部に接近させる。上下の唇は左右に引き気味に筋肉を緊張させるが、この緊張は同時に唇の全部の筋肉にも起こっている。これらの調音運動は全て左右、或いは水平方向の緊張を伴っていて、上下、或いは垂直方向の運動を伴う緊張はない。従って下顎が下がって開口部が開くことはない。/o/の調音においてはこれがすべて逆になっている。下顎は大きく下げられる。前舌部は底にまで下げられる。/i/においては左右に向かって引く力が働くが/o/においては逆に、左右から中心に向かって押す力が働く。調音運動は一部位が単独で行うものではなく、関連するすべての部位が協調して行うものであって、/o/における唇の動きには頬の筋肉も追従して、左右から中心に向かって挟むような動きを見せる。/i/においては、唇や舌の前面における筋肉の緊張によって、水平方向という現象世界における運動の一つの基軸が表象されていると考えることができる。逆に/o/によって垂直性の表象が表わされているとすることができるであろう。

「円唇性」という表現が/o/の唇の形状に関して通常言われる。これは、通常の音声学的な見方では、本来 [u] の唇について言われる言い方であって、/u/の場合は確かに唇の形状は上下左右のいづれにも偏することはないから「円唇」という言葉が当たらない。しかし/o/の場合は、関連する筋肉の動きは全て/i/とは逆に内側の中心線（これが垂直の線である）に向かって収縮する。このような動きの結果、唇の形状が多少円形に近づくように見えてもそれは本来水平方向についている唇を、左右の方向から力が働いて変形したために過ぎない。本来、水平方向に合致する形態を備えた器官を使って垂直性を表象しようとするのだからいわば無理な努力をしているということもできる。しかし一見無理な努力をすることが生命の本性であるということもできる。口の形状が自然な状態で、水平方向と一致しているのはすべての脊椎動物においてそうである。そうなるのは顎が下方に開くような構造になっているからである。顎の構造がそうなっているのは、重力の支配している物質の世界においては、下方への動きが楽で、従って迅速に行える動きだからである。/a/における顎の動きもそのような下方への動きであるが、それが重力と、垂直性の表象にはならないのは、それが重力に従い、重力と一体となった動きだからである。重力と垂直性（この二つは同一のものであるが）を表象するためには、反対の性質をもったものによる他はない。それが/i/が表象している水平方向に働く力である。この水平方向の力が/i/の場合とは逆方向に、頬の左右から中心線に向かって作用する



ことによって、唇とその周辺の筋肉の上下方向を指向する形状が出現し、垂直性の表象が完成するのである。だから/i/が/o/を作っているということもできる。

ここまで日本語の母音体系を構成するもう一つの軸として/o/-/i/軸について述べてきた。その際、常に音韻表記の/o/と/i/を用いた。ところが/a/-/u/軸については音声表記 [a] [u] を用いた。これは/a,u/については実際の音価がはっきりしているし、/u/に対して多くの場合に用いられる [u] との区別を明確にする必要があったからである。しかし/o/については、特に通時的に考えた場合、実際の音価がどのようなものだったかという点に問題がある。「上代特殊仮名遣い」におけるo<sub>1</sub>とo<sub>2</sub>の区別の問題はこの点と直接関連をもっている。

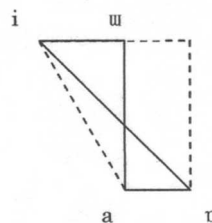
## 6. 原初的/o/の音価

日本語の/o/に近い音声として、IPAでは [o] と [ɔ] がある。これらはJonesの第一次基本母音として明確に定義され、母音空間における位置を与えられているからその調音方法や音価については何も問題はないように見える。しかしそれらの舌位（舌の高さ、[a] と [u] の間を三等分した点と定められている）について、実際の発音と一致していない場合があるという指摘が研究者たちからしばしばなされるという事態が生じた。煩瑣にわたることを避けるためにこの問題に関する議論の進展をたどることはしないが<sup>12)</sup>、当面の問題と関連のある指摘を一つだけ紹介すると、[u] と [a] あるいは [a] の間に位置するはずの [o,ɔ] が、実際の舌位をx線撮影によって確認した結果、[a] や [ɑ] の位置より下にあるケースが少なからず見出されたというのである。この指摘が意味していることは、[o] や [ɔ] の調音にはかなり大きな幅があるということであり、それは日本語の/o/についても同様であろうということである。

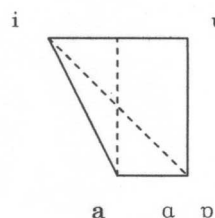
海外におけるこのような議論の展開とはおそらく無関係に日本国内でもこの問題に関連のある一つの報告がなされている。「国立国語研究所報告60」(1978:65-78)であるが、この中で報告者(上村幸雄)は、Jonesによって規定された第一次基本母音の舌の最高位について検証を行っているのだが、その結果、奥舌音 [ɔ,o,u] の調音の仕方はJonesが規定しているような、奥舌を軟口蓋に持ち上げる方法が唯一のものではなく、それより一層奥の深奥舌部を咽頭後壁に近づけて狭めを作ることによってもほぼ同じ音色で発音することができるということを見出したのである。調音位置や方法を変えても同じ音色を実現できるということは、前述のように、他の部位において補正的調整が行われるから、声道全体としてほぼ同じ音色、従ってほぼ同じフォルマント周波数を実現することができるのである。スタンダードな記述として、音声学の本などでは、日本語の/o/は、[o] と [ɔ] の中間の音などとよく書かれているのであるが、上述のように、舌の深奥部をもっと下げた位置で調音する/o/もありうるわけである。しかし日本語の音韻体系では、/o/は一つしかないから、[o] でも [ɔ] でも、或いは深奥舌の [o,ɔ] でも、すべて/o/として受け取られるのであるがその際、/o/の特徴のマークがすべての場

12) この問題についての20世紀後半における議論の様相と進展は橋本(1981:212-26)に詳しく迎られている。

合についている。それが/o/の表象作用の現れとしての、いわゆる円唇性、すなわち顔面の中心線に向かったの唇と頬の筋肉の引きよせである。そこで今問題にしようとしているのは、深奥部の/o/であるが、現代の日常的な日本語において/o/が様々なバラエティの音声で実現しているとしても、この種の/o/の現実性を実感するのは難しいかもしれない。この音声に近いと思われるものが英語（Received Pronunciation）にはある。hot, topなどに含まれる綴り字oの発音である。Jones（1972:77）はこの音の表音記号として〔ɔ〕を充てているが、改定されたIPAでは〔ɒ〕である。Jones（*ibid.*）はこの音の調音方法を「舌は可能な限り低く、後方の位置に保たれる。舌の位置は基本母音No.5〔ɑ〕と同じで、これに円唇性を加えたものである。」と説明している。この〔ɒ〕が充てられる母音をもつ言語は世界にも多くはない。しかし前述のように、〔ɔ,ɒ〕の音声でも現実には、低母音である〔ɑ,ɑ〕よりも更に低い舌位で発音されることが少なくないということは、/o/の音声は本来低い舌位と親和性があるということを推測させる。先に引用した国立国語研究所報告60（1978:76）でも、「〔ɑ〕にとって最も楽な発音の仕方は、唇に緊張を持たせず、下顎を中程度に開いて、かつ、深奥舌を咽頭後壁に向けて軽くひいてつくる深奥舌咽頭後壁的な調音である。」と述べている。ここで〔ɑ〕といっているのは標準的な〔ɑ〕ではなく、下降した方の〔ɑ〕であるが、同じことが〔ɒ〕についても、〔ɔ〕についても言えるはずである。要するにこれらは特殊な、難しい調音ではないということである。ここまで「深奥舌」の/o/について述べてきたのは、それが/o/の原初的な音声形態であったと考えられるからである。すでに述べたように、/o/の調音に当たってはこの音の調音に参加するすべての部位の動きが、重力・垂直性の表象になるように、この一つの目標に向かって一致協力する。中心線に沿って重力を象徴する垂直線が暗示されるのと同時に、顎は下降する。それと同時に可能な限りの下降を実現するためであるかのように、舌の前部もそして後部も下降する余地がある分だけ下降する。何の障害も制約もなければ、このような動きがすべて揃って/o/を実現するはずであり、原初の/o/がそのようなものであったと推測することは理にかなっているであろう（第8図）。現在の世界の種々の音韻体系の中には円唇後舌母音の様々な変種が存在する。舌の位置、円唇の程度も様々であり、従って音色もある程度それぞれに異なっている。これら円唇後舌母音の上下の二つの極限に位置するのが〔u〕と〔ɑ〕であり、これらは正にJonesが基本母音の四辺形の右の二つの角に据えたものである。これら二つは/o/の本質である垂直の表象性を失っている。英語の母音体系のユニークな点は垂直性の表象を失った〔ɑ〕と並んでそれを保持している〔ɒ〕をもっていることである（第9図）。もし日本語の原初母音体系のようなものを現（うつつ）とすれば、このような体系は幻に他ならない。



第8図 日本語の原初4母音体系



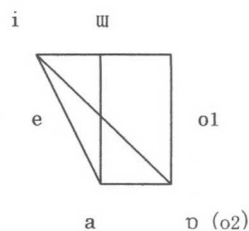
第9図 英語の四角母音体系

もしこれが現であれば、日本語の体系は幻になるであろう。このような二重構造が人間言語の現実の姿なのである。

## 7. 「上代特殊仮名遣い」におけるo<sub>1</sub>とo<sub>2</sub>の問題

さて、日本語の/o/は咽頭の一番下方に位置する「深奥部の/o/」から出発して、通時的発展の中で、もっと上方の位置を体験して現在の標準的位置に落ち着いているわけであるが、この発展経過の途上の一つのエピソードとして、「上代特殊仮名遣い」のo<sub>1</sub>とo<sub>2</sub>の問題を考察することができる。この問題は「上代特殊仮名遣い」をめぐる問題の中でも諸研究者の意見の収束が最も困難であるように見えるものである。

日本語のもっとも古い層の語彙においては、/o/は本来全て [ɔ] であった（最も舌位の低い円唇母音をあらわすこのIPAを便宜的に借りることにする、丁度/u/のために完全に適切ではないが便宜的に [ɯ] を借りたように）。語の多音節化と統辞法の発達が生むきっかけとなったことであろう。多音節化の進展によって、一語の中で、[ɯ] の後に [ɔ] が来るような組み合わせが当然生じたであろう（例えば、「くもkumo（雲）」、「つとtuno（角）」のように）。この場合先行する音節の中の [ɯ] は舌位が高いのに対して、後の音節の [ɔ] では非常に低い位置にある。この大きな上下の間隔を短縮しようとするのは自然な要求であったといってもいいであろう。このようにして [ɯ] に続く音節では自然な同化作用によって [ɔ] はもっと舌位の高い [o] の周辺に移動した。[o] は [ɯ] に舌位が近いからである。この [o] が「上代特殊仮名遣い」で言われるo<sub>1</sub>である。元の [ɔ] がo<sub>2</sub>である。しかし低い位置の [ɔ] から高い位置の [o] への移行は唐突で、無理があるようにも見える。この変化を助けた可能性のある事情として [e] の存在が考えられる。前述のように [e] は原初の母音体系に含まれていた母音ではないが、やはり多音節化と統辞法の発展の中でこの母音が出現していたということは無理のない推定と考えられる。この母音が原初体系においては空白であった母音空間における上下の中間の空間（半開の位置）の利用に先鞭をつけていたから、o<sub>1</sub>への移行が容易に行われたと考えられる（第10



第10図 o<sub>1</sub>とo<sub>2</sub>の併存期の体系図

o<sub>1</sub>とo<sub>2</sub>をめぐるもう一つの問題は一音節語におけるo<sub>1</sub>とo<sub>2</sub>の出現の仕方の違いをどう理解すればいいかという問題である。単音節語におけるこれらの現れ方に関して、1) 独立的な単音節名詞ではo<sub>1</sub>が現れる。2) 非独立的な単音節語ではo<sub>2</sub>が現れる。という二つの一般的な規則性が指摘されている（松本1995:78参照）。例えば、同じ「の」という一音節語でも、「野」の場合はo<sub>1</sub>が用いられ、助詞の「の」の場合はo<sub>2</sub>が用いられているのである。なぜこのような/o/の区別が生じたのであろうか。

繰り返し述べてきたように、言語音声は、発音器官という身体的な部位を用いた外的世界の表象として出発した。それは外界の運動や事象を再現する試みであったから、いまだ概念とい

えるほどの明確な概念を表すものではないが、外的事象の再現の試みであるという点では客観的表現であった。言語は各個人がある特定の状況において用いるものであるから、各状況に応じた主観的立場の表現が不可欠になる。そのための様々な方略が芽生えた。一つは動詞的語彙において、末尾母音を交代することによって、その動詞の表す客観的概念に対し、主観的立場や判断を自由に付加することのできる形態に変えるという方法である。これが動詞の活用へと発展する。動詞においては、客観的概念は音節形成子音の方に担われた。主観的陳述にかかわる部分は母音に担われた。ところが、動詞や名詞の客観的概念として定立されるべき、音声自体の持っていた表象性をそっくりそのまま、主観性の表現の中に取り込んで、客観的概念性を失ってしまうような語の一群が現れた。これが時枝(1940)のいわゆる「辞」(助詞、助動詞)である。助詞においても母音の交代はあったが、この助詞の母音交替には非常に注目すべき特徴があった。それはこの母音交替が、非常に多くの場合に、最終的に/o/の母音に帰着し、そこに固定したということである。例えば、「つ」>「と」,「つ」>「ぬ」>「の」,「ゆ」>「よ」という風に。これらの最終的形態の助詞は実に現代語に至るまで安定した状態を維持しているのである。ここにおいて、日本語の文法形態における注目すべき対照に気づかされる。動詞の活用における/o/を含む形態の乏しさと、反対に、助詞の形態(ほとんど一音節語である)における/o/を含む形態の豊富さである<sup>13)</sup>。一方、単音節の名詞語彙にも/o/を含んだものは少なからずある。ここで問題点を想起して再確認しておく、単音節の名詞語彙では/o/を含む場合それは/o<sub>1</sub>/である。助詞語彙の場合はそれは/o<sub>2</sub>/である。なぜそのような分離が起こったのか。

「こko(来)」、 「そso(為)」は、それぞれカ変動詞、サ変動詞の命令形であるが、これらにおいてのみ、動詞の活用形態の中に/o/が残っている(「そ」については「な行きそ」のような場合に痕跡的にのみではあるが)。そしてこの二つの音節は助詞としては用いられてはいない。カ行、サ行以外のオ列の音節も命令形として用いられていたということはあることである。しかし助詞の発達によってオ列の音節が助詞によって占められるようになるとオ列の命令形の使用が回避され、その代わりに「よ」、「ろ」というオ列音の助詞が、動詞の連用形に接して命令形に代替するようになったという経過を推測することができる(為よ、見よ、など)。

表現、表象の意志自体は人間精神の内面からのみ来るものである。人間は身体的器官を用いて外部的世界を表現、表象しようとする。身体的器官だけが外部的世界と共通の客観的物質性をもっているからである。身体的器官は、運動の形態を通して表現、表象を行うから、外部世界については何よりもまず、そこにおける運動と事象、即ち全体として把握された運動の経過、顛末が第一に表現、表象される。調音器官の運動に基づいた言語音声についても同じことが言える。従って、動きを表現する動詞的語彙が言語の発達の過程において、常に先頭を切っ

13) 木田(1988:60-61)は、「日本書紀」の全語彙の総音節数調べの結果として、o<sub>0</sub>,o<sub>1</sub>,o<sub>2</sub>を含む音節の合計が、全体の21.8%であるのに対して、助詞に限定した場合は52.3%になるという数字を上げて「o列音の特殊な位置」について注目している。

たということが出来る。動詞的語彙を用いて表現しようとする場合、主観的要素と客観的要素が常に相伴っている。それは世界の事象を表そうとするが同時に、その状況における対人関係に関する意図が含まれるからである。名詞的語彙と助詞的語彙に関しては事情はまったく違う。これらは時枝が「詞」と「辞」と名付けた二つの言語カテゴリーをそれぞれ代表するものである。名詞は主観的、個人的要素の片りんも残っていない、完全に客観化された概念を表す。助詞は逆に概念化された意味はもたない。助詞もまた音節によって（多くは単音節である）担われているから、音声に由来する表象的意味をもっている。しかしその意味は客観的概念とは全く無縁である。

言語には音声があつたのであって、文法的形式があつたのではない。だから、命令形というような一つの動詞の形態や活用形式があらかじめ存在していたわけではないであろう。「こ（来）」とか「そ（為）」という形態が話者の相手に対するある行為の実現に対する要請を意味していたとしても活用形式とは元来関係のないことである。そういった意味はもともとこれらの音声形式自体に含まれていたのである。命令の意味は主母音である/o/が表わしていたのであろう。だから他の子音と結びついたもっと別の、同じ形式の「命令形」が存在したとしても不思議ではない。「命令形」は動詞自体の概念的意味のほかに話者の意志を表している。その点で主観性の非常に強い動詞の形態である。一方助詞においては全てが主観性の枠の中に取り込まれている。だから「命令形」(/o/の母音で終わる推定上の命令形)と助詞(その大半は/o/を含む音節である)は重複する共通の性格をもっていたということが出来る。この重複が動詞の活用形(命令形)から/o/が退却していった原因であろう。これら二つの語形態はともに本来の音声表象と意味的な結びつきを保っていた。つまり原初的な音声体系の構成要素である/o/の表象作用の反映を伝えるものであつた。その音声的実現が[ɔ]であつた。「上代特殊仮名遣い」の用語を用いれば「オ乙(o<sub>2</sub>)」である。

前述のように二音節化の発展の中で[ɯ]に後続する音節の[ɔ]が順行同化的な、自然な音声変化によって舌位を上げた結果、[o]に近い音質に変わった。また、「すくなし(少)」>「すこし」、「すぐす(過)」>「過ぐす」におけるような[ɯ]から[o]への変化もあつたという事実から、[ɯ]と[o]との音声的近縁性が意識されていたことは推測できる。そのことは同時に[o]と[ɔ]の差異の意識にも繋がつたであろう。二音節化の潮流が既に始まっていたとはいえ、一音節語が語彙体系の中で占める地位が確固としたものであることに変わりはないであろうし、意味の多重化(同音異義語の増加)が既に進展していた一音節語の相互間の区別をつけるための方略も様々試みられていたから、/o/の音質におけるこの分化がその方略の一つとして利用されたとしても自然なことであつたであろう。後代にまで継承されたオ列の一音節語として「と(戸、門、外)」、「の(野)」、「も(裳、藻、喪)」、「よ(夜、代、節)」などがすぐに挙げられるが、これらの名詞語彙の中で、語として独立性の強いものは[o]が、独立性の弱いものは[ɔ]が充てられるというのが一般的傾向であつた。これらの音節は又助詞の類にも用いられている。同じ音節が名詞と助詞によって共有されることが少なくなかつたわけである。助詞は機能的な語であり、語の継起の中で控えめな位置を占めるものであるから、

発音においても意識的な努力にはそぐわないような性質のものであったであろう。[ɔ] が本来の/o/であり、自然で容易な調音であったから助詞類はこれをそのまま保持した。一方 [o] の方は、多音節語において [u] に継起するような場合こそ自然で容易な発音であったであろうが、独立した音節においてこれを発音することは当初は意識的な努力が必要であったであろう。助詞に比べて文中で意識してあるいは強制的に発音されることの多かった名詞類にはこの音声の方が相応しいと感じられたとしても不思議ではない。しかしこれは一種の流行のような側面もあったであろうから、機械的な一斉の変化が起こったわけではなく、一種のためらいの後を窺わせるような不斉一さが古代文献の表記の中に見出されるのもまた自然なことに思われる。

「上代特殊仮名遣い」にその痕跡を残している上記のような/o/の音韻における一種の分裂現象によって二種類の/o/が使い分けられていることから、音韻としての区別が確立していたと考える研究者も少なくない。しかし分裂があったのは事実としてもなぜそれがもっと永続的に定着しなかったのか、なぜ最終的に一つの/o/に落ち着いたのかということを考えるべきであろう。もし日本語の母音体系の骨子が以上述べてきたように成立したものであるとすれば、それは(子音の体系とともに)語彙形成の原動力として、言語体系の総体を支えるものであるから、単に音声的な理由だけで基本的な体系の構造が変化することはなかったと考えられる。

4 母音からなる原初の体系と現在の 5 母音体系の間には/e/の登場という大きな問題がある。これはここで手軽に扱うにはあまりに大きな問題であるので別の論考のテーマとして残すことにする。

## 8 . 基幹語彙の意味を通して見た母音体系の構造 - 素描的検証 -

### (1) イ - オ軸について

この対立、対照は生物と無生物を両極に置いていると考えることができる。或いは生命と物質と言い換えてもいい。物質の特質の最大のものとして重力を捉えている。「オ」を発音するための調音器官の動きと形態は垂直性の形象を実現して、自然界における基本的力である重力を表象、象徴している。「オ」と「イ」という二つの母音の対照によって、重力と対立する力として生命力が把握されている。生命をもたぬ物は重力にのみ絶対的に従う。重力の桎梏を破る力を備えているのが生命である。「イ」はそのような力を象徴するために水平の線を表象するような調音器官の形態をもって発音される。重力に束縛されないから動物は自由に運動したり、植物は重力に打ち勝って天に向かってその形態を成長させることができる。生命を失うと動物も、植物も重力の作用に従って、倒れ、地上に横たわる。このような「オ」と「イ」の対照をよく示しているのが「おくoku(置く、)」と「いくiku(生く)」である。「おく」は自動詞的に用いられた場合に最も本義を表している。つまり雪や露などが空から降下して葉や地上にとどまることを意味する。「降下する」というのも重力の作用を現わしているが、「とどまる」のも同様である、物は重力の作用によって静止するものであるから。他動詞としての「おく」は人間の行為として言われることが多いが、人間の手を介して物を重力の作用する静止した状

態にすることを意味する。

「いくiku(生く)」は生命力が発現している状態を全般的に意味する。日本語の動詞の包括性、抽象性をよく示している。ところが「いき(息iki)」の形をとると具体的な生理活動を意味する。「いかshikasi」という形容詞形は古代的な意味は植物が繁茂している状態を形容する言葉であったが、生命力に対する畏怖の感情から「厳かし」の意味に変化したのであろう。

「おすosu(圧す、押す)」は置かれた位置において、ものが皆もっている下方へ向かう圧力作用を意味していたが、この動詞も人間的意味に拡大転用されて、力を加えて圧力をかけることを意味するようになった。そこから「おそふosofu(襲ふ)」、「おそるosoru(恐る)」、「おそしososi(遅し)」などの派生語を生んでいる。「おすosu」に対応する「いすisu」という動詞形態は見られない。しかし「いさ、いざisa, iza」とか「いそiso」などの形態が残っている。このis-の形態にはos-には濃厚に含まれている物理的圧力のイメージは全くない。その代わりに心理的切迫感といったようなものがこれらのいずれにも窺われる。「いさ、いざ」は相手に対する抑制、疑念、勧誘、挑発などの気持ちを、直接的に、つまり動詞のように概念化することなく表出した言葉である。いわゆる「辞」の典型的なものである。「いそiso」は「いそぐisogu(急ぐ)」、「いそしむisosimu(勤しむ)」などの動詞に含まれる。いずれの場合にも、「おすosu」に読み取られる物理的圧力とは対照的な心理的力の作用が認められる。

「おつotu(落つ)」の「つtu」は、「つくtuku(着く、突く)」に表れているように目的地点への到着、または衝撃的な勢いをもつての打撃を意味する。だから「おつ」は単に落下を意味するのではなく、落下して地上に当たるまでを表している。音響を「おとoto」と表したのは不思議ではない。落下による衝撃が地上における音響発生のもっとも一般的な原因だからである。落下にせよ、音響にせよ自然に内在する力と性質によって発現する客観的現象である。「オo」という音声自体がそのような力と性質を反映、表象している。「おつ(落つ)」、「おと(音)」と表現されるような客観的現象を前にしたときの、意識の内面の状態を表象しようとするとき、これらの音形をそのまま用いながら、発音の様相を少し変える。「おづodu(怖づ)」、「おどodo おどろく(驚く)」などである。これらの音形の変化(有声化)においては音声の変化自体が隠喩的転換を生んで客観的現象の表現から主観的現象の表現への変化を実現している。「おるoru(降る)」においては、閉鎖音[t]の弱化は有声音よりさらに進んでいる(「弱化」とは舌先で閉鎖を作るときの圧力の減少を意味している)。この弱化によって意識によるコントロールが暗示されている。「降る」はそのようなコントロールされた下降を意味する。「降る」からの隠喩的転換が「おるoru(織る)」である。

「おつotu」に対して「いつitu」には動詞的概念は表象されていない。客観的現象として把握することはできないが、しかし痛切に感じないではいられないような力を「いi」という音声は表現している。「生きている」という現象は内面的に感じ取ることによってしか直接認識することはできない。「厳」という漢字が充てられる「いつitu(厳)」がそのような、客観的には捉え難い力の存在をよく示している。このような「捉え難さ」の意識が、同じ音形を、疑問詞に隠喩的に転換する契機となっている：「いつitu(何時)」、「いづidu いづこ、いづれ」。

物の落下を客観的に観察しているだけならいかなる感覚も誘発されることはない。しかし観察主体自身が落下した時はどうであろうか。その時は主観的な感覚、すなわち生命のみが感受する感覚が生じるであろう。それが「いたita(痛)」である。この場合にもやはり概念化された動詞形態「いつitu」は文献時代には残っていない。「いたし、itasi」は形容詞であり、時枝(1948)の分類では形容詞は概念化過程を経た「詞」とされている。しかし「痛い!」と主体の感覚の直接的表出は可能であるのに「彼は痛い」というような客観的な叙述には適合しないのは、この言葉が十分の概念化過程を経てはいず、生命の反応の直接的表出という性格が強いためである。程度の甚だしいことを意味して副詞的に用いられる「いたita(甚)」になると抽象化、概念化が進んでいるけれども、「いた(痛)」との連続性は理解できる。しかし本当の隠喩的過程を経た思いがけない意味の変容がある場合は語源的関連を確実に辿ることはほとんど不可能になる。「いたita(板)」の場合がそうである。この場合は、石器の工具を用いて、丸太の木を割って平らな平面をもった木材に仕上げるまでの、太古の人々の極度の(この概念も「いた」の意味範囲内である)労苦を想像して、そのような意味変化の可能性を推測することができるだけである。

「いつ」に関して音声の変容を通じた意味変化の跡を観察することができる。「いづidu」、「いるiru」への変化である。「おつotu(落つ)」においては目に見える物質の地上への到来が問題になっている。畏怖すべきものや神秘的なものは何もない。ところが「いつitu(巖)」においては目に見えない、名状すべからざる存在が人の意識に対峙する場に到来していることが問題になっている。意識が(或いは理性が)把握できないものであるから、その動きを概念化して動詞としての形態に至らせることができない。動詞としての形態に「いつ」を変えるためには、「名状すべからざる」存在を消去しなければならない。ここでもまた有声音化によってそれがなされる。「いづidu(出づ)」には到来、または出現という含意以外のものは何もない。「いぬinu(去ぬ)」になると逆に退去、消滅を意味するが、この違いは/*v* (/d/)と/*n*の二つの子音の性格の違いに関連しているであろう。/*v* (/d/)から閉鎖音の弱化がさらに進んで流音化されると「いるiru(入る)」となる。「いつitu(巖)」においては人間意識と超越的な存在の対峙の構造がそのまま表れている。「いづidu(出づ)」においては抽象的な動きだけが表現されるのであるが、人間の意識は「こちら側」にあって「あちら側」と対峙する受身の観察者の立場にあるという点では「いつ」におけるのと変わらない。だから「いづ」には自動詞的な意味しかない。人間が主体となる他動詞に転化するためには「いだすidasu(出す)」と二次的な形態の転換を行う必要があった。「いる」は、自動詞である「いづ」と同じく下二段活用であるがこちらは最初から他動詞である。つまり最初から人間的な行為を意味しているのである。自

- 14) 動詞の活用の種類に関して、どれが本来の古いものでどれが二次的に発達したものかということはまだ解決されていない問題である。現時点では、圧倒的に数の多い4段活用が本来のものとする説がやや優勢かも知れない。しかしこの問題は考えるべきことがまだ多い。この「いづ」、「いる」を巡る自動詞 他動詞、2段活用 4段活用の転換は、この問題を考えるための一つの材料になるであろう。



動詞に変わるのは4段活用で転換することによってである<sup>14)</sup>。

「おふofu (負ふ、追ふ、覆ふ、生ふ)」は非常に多義的であるのに対して「いふifu (云う)」は発言に関するただ一つの意義しかない。多義的な「おふofu」のそれぞれの意義に共通して垂直性のイメージが関わっていることは容易に見て取ることができるであろう。この二つの共通の語尾「ふfu<sup>15)</sup>」は「あふafu (会ふ)」、「かふkafu (交ふ)」、「とふtofu (問ふ)」などからよく窺われるように、二者の存在を前提とし、二者間の交渉に関わるような意味をもっている。動詞接尾語としての「ふfu」は反復、継続の意を表すと一般に云われているが、これをもっと抽象的にいえば複数性であり、更に複数性の根源である「二」から「二者」、「二物」を意味するということもできるであろう。「おふ(負)」は上から掛かる重みを受け止めている状態だが、重みを受け止める側が主体になっている。しかし「おふofu」という音形自体は重みをかける方、受け止める方の双方の立場を含んでいる。その証拠に「追ふ」の場合は逆に圧力をかける側が主体となった意味である。ただしこの場合作用する力は物質的な重力から、逃げる相手との距離をゼロにしようとする意志の力に、隠喩的に転換がなされている。「おふofu (生ふ)」もやはり上から掛かる物質的重量と下でそれを支える生命的意志の双方を含んでいる。「生ふ」は「成長する」という意味に近いが、「成長する」とは第一に生命体の物質的な体躯と体重の増大を意味するが、この増大を受け止め支えるのは生命体自体である。「おほofu (大、多)」はここから派生した日本語の基礎語彙の一つである。

「いふifu (云ふ)」という動詞の目立つ特徴はその意味が非常に限定されているということである。また派生語もほとんどない。この動詞の意味が人間の言語活動にのみ関わっているということのはっきりしている。また人間が言葉を使うということもはっきり把握されている。言語という現象の捉え難さは現代の人間にとっても太古の人々にとっても同じように捉え難いものなのであろう。「いふ(云ふ)」という言葉の意味的限定性、孤立性はこの点と関係があるに違いない。隠喩的な転換によって語義の発展が行われるためには、基礎となる語の概念がはっきりと把握されている必要がある。しかし「云ふifu」の場合はそこに問題があったために隠喩の基礎とはなり難かったのであろう。そのために多義性を発展させることがなかったのであろう。

## (2) ア - ウ軸について

日本語の母音体系の骨組みになっている二本の軸のもう一本がアとウを両極にもつ軸である。ア [a] の調音は口腔内の空間をできるだけ大きくするように調整される。勿論実際の発話においては常に最大の開口が実現されるわけではなくこのような目標に向かうほどほどの程度の開口で [a] の音の同定はなされる。ウ [u] の調音はア [a] と全く逆のことを目指して

15) 八行の子音が古層の日本語においてはp音であった可能性が高いこと、また現代語では従属音節はワ行に変化していることは周知のことである。しかし本稿では古典文法と古典仮名遣いを基準として、八行音のローマ字表記にはfを借りることとする。

いる。即ち口腔内の空間を最小限に狭めようとするのである。完全に閉鎖してしまうと母音としての音声が出なくなるから、最小限の空間を残している。このようにこれらの母音はそれぞれただ一つの目標に向かって調音される。この目標がこれらの音声の表象であり、意味であるということができる。

「あくaku（開く、空く）」と「うくuku（浮く、受く）」のコントラストについて考えてみよう。「あく」に対して開、空、明、飽などの漢字が当てられ、それぞれの漢字はこの「あくaku」という音形と表象が適用される様々な状況に対応している。また自動詞か他動詞かに応じて4段活用と2段活用が振り分けられる。しかしいずれの場合にしても「アa」の表象、即ち空間性の増進という意味は素直に現れている。分化した様々な意義の中で注目すべきは「飽く」（本来は4段活用）である。他の意義の「あく」においては、客観的な外の空間が問題になっているのに対して、「飽く」において関わっているのは内面の心理的空間である。客観的世界の事象を表す言葉が隠喩的に転換されて主観的世界の事象を現出させているのである。このような思考方法においては、現代のわれわれが慣れ親しんでいるような空間、時間、意識の区別は存在しなかったことが推測される。そのような区別が存在しないから自由な隠喩が成立し、言語の創造と発展が促進されたのであろう。

「うくuku（浮く）」とは物理学的にいうと浮力の働いている状態である。浮力とは水（または流体）の中の物体には、その物体が排除した水の重量と等しい力が、重力と反対の方向に働くことをいう。物体によって水が排除されるということは、水の存在を基準とすれば、その場所に潜在的な空虚ができていうことである。排除された水が潜在的な空虚を埋めようとする圧力が浮力であると見ることもできる。このように空虚状態が出現し、それと同時にそれを埋めて解消しようとするプロセスが作動するということが現象の世界に現われることがある。ウ/u/という音声が表象しようとしているのはまさにそのような事象である。「浮く」という現象を水の側から捉えると「受く」である。この下2段活用動詞は本来は「浮く」（4段活用）の他動詞形であったが「浮かす」というもう一つの他動詞形が定着したために「受」の漢字で表わされる意味に限定されるようになったのである。というよりむしろこの漢字の使用によって「うくuku」の包括的な意味が分断、限定されているということもできる。

「あすasu（褪す）」は下2段の自動詞である。空間が空無の状態に近づいていくためにはその空間に存在する物が消失していけばよい。「あすasu」はそのようなプロセスを意味している。この動詞は現代語においては用法が限定されて、色が「褪せる」、気持ちが「焦る」のような場合にのみその命脈を保っている。もっと古い時代には、「つばな抜く北野の茅原あせゆけば<sup>16)</sup>」のようにモノがだんだん消失してまばらなることを意味したり、「石船の泊てし高津は浅せにけるかも<sup>17)</sup>」のように、存在していた水が失われて水位が下がることを意味したりというように、「あすasu」の原義が幅広く生かされていたことが分かる。なお現代語の「焦る」は「浅

16)「山家集」下

17)「万葉集」二九二

す」からの転義で気持ちの深みが失われた余裕のない状態を意味している。形容詞語幹「浅」、名詞「朝」もこの動詞からの派生である。

「うすusu ( 失す )」も「あすasu」と同様、下2段の自動詞である。意味的にも共通している部分があるが、「あす」の方は消失へ向かう動きを表すがまだ残存しているものに注意が向いている。「うす」は完全な消滅自体を意味する。ウ/u/は空虚の存在とそれを埋めて解消しようとする動きの両方がセットになった事象を表象する音声であるが、「うす」は消滅という現象に焦点を当てた表現であるといえよう。とは言え「うすれるusureru ( 薄れる )」と変化した形で現代にまで残っている派生形は「あすasu」との共通性を残している。形容詞語幹「うすusu ( 薄 )」も同様である。名詞の「うすusu ( 臼 )」、<sup>18)</sup>「うそuso ( 嘘 )」もここから派生したものであろう。「臼」は木をくりぬいて空虚を作ったものであるし、「嘘」は「うそぶく」という言葉もあるように、ウを発音するときのように唇をすぼめて口笛を吹くという意味から、実質のない空虚な発言と変化したものである<sup>18)</sup>。

「あつatu ( 当つ、充つ、宛つ、中つ )」は「あす」、<sup>19)</sup>「うす」と同様、下2段活用であるが、他動詞である。自動詞形は二次的に成立した「あたるataru」である。「うつutu ( 打つ、撃つ )」は4段活用であるが形態的な自動詞他動詞の分化はない。「あつatu」は空間内に存在していた何かが空間内を移動することによって何物かに出会い、その物との隔たりがゼロになるという事象を表す。この事象の中に様々なテーマが含まれている。空間、他者の存在、目標、目標への志向、移動、到達、付着、付与など。この中のどれに焦点を置かによって多くの様々の派生が生ずる。二、三の例を上げると、動詞としては、「あたふatafu ( 能ふ、値ふ、与ふ )」、形容詞語幹としては「あつatu ( 厚、暑 )」、名詞として「あたata ( 仇 )」(これは本来は他者、相手であり敵を意味するわけではない)。

「うつutu」はこの音形のままで動詞にも(「うつ(打つ、撃つ)」、名詞にも(「うつ(空、内)」、形容詞語幹(「うつ(現)」)にもなっている。この場合もまた一つの事象の様々な局面をそれぞれが強調している。「うつ(打つ、撃つ)」のウは「うく(浮く)」のウと同じで空虚を埋める力である。「釘を打つ」とか「ボールを打つ」という場合でも、不動の存在に対してただその表面に打撃を加えるということの意味しているのではない<sup>19)</sup>。打たれた釘は木材中の空隙を埋めるように進入し、打たれたボールは空気分子の間隙を縫って空を飛ぶ。空虚の中に貫入するような動きを与えること、それが「うつ」である。「うつ」が本来このような一つ事象についての全体的な表象であるとしても、言語の実際的な使用においてはその状況に必要な概念だけを借りれば用は足りるといことが多い。一々その語の全体像を意識して使う必要

18)「岩波国語辞典」,<sup>19)</sup>「字訓」も同じ説をとっている。

19)「うつ」の定義として「たたくこと」,<sup>20)</sup>「たたく」の定義として「うつこと」, などという不明確な記述が辞書などで見かけることがあるが、日本語のネイティブ話者がこれらの違いを把握して正確に使い分けているのは、音声自体からの意味情報に対する感受性が完全には失われていないことの証拠である。

はない。だから単に打撃を加えるという意味で「うつ」を用いることがあるのと同様に、この同じ言葉を「空虚」を意味するために用いることがあるのも当然である。「うつろ<sup>uturo</sup>( 虚ろ )」、「うつぎ<sup>utugi</sup>( 空木 )」などである。「空虚」の概念から「内部」の概念、「うつ<sup>utu</sup>,うち<sup>uti</sup>( 内 )」、或いは「全体」の概念<sup>20)</sup>に転換した経路は理解することができる。しかしこの言葉は又「現実」の概念とも結びついている。「夢かうつつか」というように(「うつつ」は「うつ」を重ねた「うつうつ」の略と一般に解されている)「夢」と対立する「覚醒状態」、「覚醒状態で見える現実」を意味している。このような隱喩的変換を成立させた古代人の思考の経路を辿ることは困難であるが、「全体」の概念に由来しているという可能性が考えられる。夢状態の意識と覚醒状態の意識の相違点を「全体性」という点で捉えたということはあることである。覚醒状態においては、夢状態とは違って、目に見える現実全体として、欠落や、断絶なしに、一続きのものとして意識に映るということが、複雑な思考過程なしで直感的に把握されたということはあることである。

「あふ<sup>afu</sup>( 会ふ、合ふ )」という動詞はあるが「うふ<sup>ufu</sup>」というコンビネーションは見られない。「うは<sup>ufa</sup>、うへ<sup>ufe</sup>( 上 )」という現代語に到るまで命脈を保っている、他の経路に由来する組み合わせは存在するが、「うふ<sup>ufu</sup>」という動詞形が存在した形跡は見られない。「うふ<sup>ufu</sup>」という音節の組み合わせは「あふ<sup>afu</sup>」、「おふ<sup>ofu</sup>」、「いふ<sup>ifu</sup>」などと比べて調音部位の連続性の点で、発音が容易であることから考えても、もし元来存在したものなら途中で失われるということはなかったであろう。音節の組み合わせは表現上の必要性に応じて選ばれている。もし恣意的にどのような組み合わせでも実現されるとすれば、発音の容易なものが避けられるということは考え難い。音節の組み合わせは表現上の必要性に応じて選ばれているのである。ある組み合わせの必要性が生じないとすればそれは、それぞれの単音節の意義が互いに矛盾したり、親和性を欠くからである。「あふ<sup>afu</sup>」という組み合わせの場合、前述のように、「アa」は自由な運動を許容する空間、「フfu」は二者としての存在形態に関わるような動きと状態を表象する。これらの表象が抽象的で漠然としたものであるのは、それらが運動(調音器官の)を通して、客観世界の運動を含んだ事象を再現しようとしているからである。「あふ<sup>afu</sup>」と結合することによって単音節の意味的抽象性とあいまい性が限定され言語表現としての明確さが増している。「うふ<sup>ufu</sup>」という組み合わせが成立しなかったのは、「ウu」が空間性の解消へ向かう動きを表すのに、「フfu」は二者の並存を許容する空間を必要とするという矛盾のためであろう。

## 9 . 結び

20)「うつ」がこの概念と結びついている例は古い時代にもみられる。「皮を内剥ぎ(うつはぎ)に剥ぎて、衣服とし」(「古事記上」)。この「内剥ぎ」は「神代紀上」では「全剥ぎ」と表記されている。

21) 日本語の古い母音体系として4母音体系が存在したであろうとする説はこれまでに何度も提唱されている。大野1980:146、松本1995:88参照。

日本語の母音体系の原初的姿としての4母音体系<sup>21)</sup>の構造とその構造の由来、これらの4母音のそれぞれの表象性が基幹語彙の形成にあたってどのように作用していたかを概略的に検証しようと試みた。この検証のために選んだ語彙の種類はたいへん限定されている。即ち基本的にすべて2音節動詞であり、それも第一音節が単独母音で第二音節が子音プラス母音であるような構造の2音節動詞である(「あくaku」、「おつotu」のような)。単独母音の音節の方が子音と結びついた音節より母音の表象的特質をより明確に表しているからである。単独母音の音節が2音節語の末尾音節になるということはない。「あくaku」とか「いたita」という結合は可能であるが、これを倒置した「くあkua」とか「たいtai」という結合は避けられてそのような語は存在していない。このような母音連続を避ける傾向は日本語には古くからあった。

二音節動詞の場合、語末音節が「活用」と呼ばれる形態変化を行う。一音節の動詞も存在していて、これらも母音交替をして「活用」する<sup>22)</sup>。子音部分是不変である。だから子音部分が動詞の本質的な概念の部分を担っているように見える。二音節動詞の場合も同じであって、変化するのは末尾の母音だけである。その他の部分是不変であって、この部分がその動詞の不变の概念の部分を担っていると考えられる。交替する母音部分の役割は何か。

動詞は本質的に運動に関する概念と結びついている。運動ではなく状態を表すように見えても元来運動を表すものが後に変化したのである。音声は生命体の内部からの衝動や欲求の発現として現れたものであるが、これは言語にとっては素材に過ぎない。言語が出現するためには、外部の世界における現象を観察して、外界における運動や変化をまとめた事象として認識し、外界における運動や変化が人の調音器官の筋肉運動を通して再現されることが必要であった。このような再現は一種の共鳴現象と考えることができる。共鳴現象は物理的法則に従った必然的な自然現象であって自然に内在する性質の発現である。調音器官の筋肉運動は随意筋の活動による意識的な過程であるから自然現象とは言えないのであるが、検討してきたような母音構造の、自然的世界における運動、変化の構造との共通性を考えると、このような共通性の認識に基づいて言語を発展させた人間の精神的活動が、そのような半ば無意識的な共鳴現象によって支えられていたことを一つの仮説として考えてみることはできるであろう。母音発声の際の物理的共鳴の役割については既に音響学的に十分な実証的研究がなされている。即ち原自然ともいべき声帯の振動における混沌とした周波数群の中から、各母音に特有の調音運動の結果として形成された口腔の形態は、それぞれの母音が必要とする周波数を拾い上げ、強調するために、共鳴を起こすのである。その結果生み出されるいくつかの特徴的な共鳴周波数の組み合

22) 厳密にいうと、連体形と已然形には「る、れ」が付加されているから二音節になっている。しかし日本語の音韻体系においてラ行音は二次的に追加されたものであって、非4段系の活用においては活用体系の整合性のためにあとから付加されたものと考えられる(この点については小林2006参照)。また上一段活用では動詞としては母音交代はない、しかし「みmi(見)」「まma(目)」、「いi(射)」「やja(矢)」、「にni(煮)」「なna(菜)」のような母音交替は動詞活用の萌芽の状態の残存と考えられることができる。

わせによって各母音の音色が決定される。

ともあれこのような過程を経て外界の事象は人の意識の対象として客観的に把握される。客観的に把握された運動は概念を構成する。概念は抽象的な普遍性を備えたアイデアである。このようなアイデアが動詞的語彙の核心にあるのだが、人が生活の場面で動詞を使用しようとする場合、状況に応じた話者の主観的立場の表現が必要になる。その必要性に応ずるための側面が言語には発達する必要があった。それが時枝文法でいわゆる「辞」である。「辞」の使用に対応するための動詞の形態変化、それが「活用」の本質である。言い換えるなら母音交替自体が「辞」と一体であり「辞」とは別物ではない。「辞」は主観的立場の表現であり、発話主体の「心の声」<sup>23)</sup>であるが、本能的、盲目的叫びではなく、言語的な表現であるという限りにおいて、それは客観的な概念の支えがなければ成立しない。動詞の形態変化とは母音の交替であるが、交替する母音は一種の「辞」であり、客観的概念を表現する「詞」ではない。従って客観的意味はもたないけれども、主観的な何らかの表現、意味作用は行っている。その意味作用の手段を借りてくる先はどこかといえば、各母音がもともと備えている表象的概念をおいて他にはない。「あくaku(空く)」、「あきaki(空き)」という二音節動詞の二つの活用形において、第一音節の「あa」はこの母音が本来持っている表象性をそのまま保持している。「くku」も「きki」もそれぞれの表象性を深層において保持していると考えられる。しかし我々の通常の言語意識ではこれらの構成要素としての個々の音節の概念を意識することはない。なぜなら、この二音節語の表す概念は個々の音節の概念の合算によって成り立っているわけではないからである。新しい一つの概念を表現するために、その新しい概念を表現する目的に適うような概念をもった二つの音節を借りてきたに過ぎないのである。部分の合計が全体になっているのではない。目的が達成され新しい語が得られた上は、そこに至るまでの過程は、その語を使って言語表現を行うために全く不要である。

「あくaku(空く、開く)」と一つの語が形成されると、これはその構成要素である二つの音節のそれぞれの抽象的な表象性を越えた明確な概念を表している。とはいえこの動詞も動詞特有の抽象性と非限定性を免れていない。個々の状況に適合した具体性を表明するために種々の規定語、限定語を連ねる必要がある。「部屋は近くあく」とか「ドアが風であく」とかいう風に。日本語の言語表現は規定する語を、規定される語の前に置くことによって構成されるのが特徴である<sup>24)</sup>。これが日本語の「語順」の原則である。これを逆に考えると文の最後に置かれた語が最も抽象度が高いといえることができる。これは語で構成する文のレベルで言っている

23) 時枝 (1948:232) が引用している江戸時代の国学者、鈴木朗の言葉。

24) この点を指摘したのは関口 (1962:544) である。

25) 統辞法 (syntax) の起源と進化のモデルとして、音節 (syllable) の構造を考えるというアイデアは、Carstairs-McCarthy (1999) によって提出されている。このアイデアはTallerman (2005:133-152)、Bickerton (2007:518) らによって厳しく批判を受けているが、これらの批判自体、西洋の主流的な言語学の偏向を象徴しているといえるかもしれない。

のであるが、同じことを語を構成する音素のレベルで考えることができる<sup>26)</sup>。文の最後に動詞が来るのと同じように、複音節動詞の末尾音節は活用する。これは末尾音節が本来一音節語の動詞であったからである。一音節動詞自体が更に構造をもっている。子音と母音の二つの音素によって構成されているからである。他の要素によって規定を受けそれ自体は何をも規定しない要素が末尾の母音である。ところが他の語に規定されて「達意眼目<sup>26)</sup>(文の結論)」の焦点になるはずの末尾動詞が規定する側に回ることが生じる。その後助詞、助動詞のような「辞」を従える場合である。このような達意眼目としての「辞」を接続するための準備として動詞の語尾は交替する。動詞の活用形は全てそのような「準備形」であるということが出来る。終止形のように後続する「辞」がなくて文を終止する形態でも活用形の一つであるという限りにおいて潜在的な「辞」を従えていると考えることができる<sup>27)</sup>。

日本語の動詞は語末に必ず母音が来る。第一音節に母音が来る語も多い。本稿における検証のために取り上げたのはこれらの語頭母音の動詞群である。更に、万葉語彙の調査によれば、ア行の母音を語頭にもつ語は全体の二割以上を占め、一割五分の力行をはるかに抜いて第一位である<sup>28)</sup>。このように母音音節はそれが語頭に来る場合も語尾に来る場合も日本語の語彙形成において中枢的地位を占めている。しかし語頭にあるのと語尾にあるのでは対照的にその機能は異なる。語頭にあっては、本稿において検討したように、その語の語義の構成に参加しているために、その母音の本来の表象の概念性を強く保持している。それに対して語尾にある場合は、語の概念には関与しないで、その代わりに母音の表象性は話者の主体的立場からの表現のために貢献する。概念性が希薄であるから、各活用形の交替母音の存在意義は非常に把握し難い。これは言語使用における最も無意識的、盲目的な部分である。もしこの無意識的な部分を意識的に理解しようとするなら語頭音節におけるような母音の概念的な表象性に基づくほかはないであろう。

## 参考文献

大野晋・佐竹昭広・前田金五郎(編)(1974)「岩波古語辞典」東京：岩波書店  
白川 静(1995)「字訓」東京：平凡社

Bickerton, Derek (2007) Language evolution: A brief guide for linguists, *Lingua* 117 (2007) pp.510-526

Borden, Gloria J. et al (2003) *Speech Science Primer - Physiology, Acoustics, and Perception of Speech 4<sup>th</sup> ed.*

Lippincott Williams&Wilkins Inc.,USA. 廣瀬 肇訳(2006)「新ことばの科学入門」東京：医学書院

Carstairs-McCarthy, A. (1999) *The origins of complex language: an inquiry into the evolutionary beginnings of sentences, syllables, and truth.* Oxford: Oxford University Press.

26) この用語も関口(1960,1961)から借りた。

27) 時枝(1948:243)は「零記号の陳述」という言葉でこのことを説明している。

28) 坂倉(1966:15)による。

- Crothers, John (1978) 'Typology and universals of vowel systems'. In Joseph H. Greenberg et al (eds) *Universals of Human Language*, Vol.2, *Phonology*, pp.93-152. Stanford: Stanford University Press.
- de Boer, Bart (2001) *The Origins of Vowel Systems*. Oxford: Oxford University Press.
- Edie, James M. (1976) *Speaking and Meaning: The Phenomenology of Language*. Bloomington: Indiana University Press. 滝浦静雄訳 (1980)「ことばと意味 - 言語の現象学 - 」東京：岩波書店
- Emerson, Ralph Waldo (1906) *Emerson's Essays*. London: Everyman's Library.
- 橋本萬太郎 (1981)「現代博言学」東京：大修館書店
- Jakobson, Roman (2004) 'The Sound Laws of Child Language and their Place in General Phonology'. In Barbara C. Lust & Claire Foley (eds) *First Language Acquisition, The Essential Readings*, pp.285-293. Malden: Blackwell Publishing Ltd.
- Johnson, Mark (1987) *THE BODY IN THE MIND: The Bodily Basis of Meaning, Imagination and Reason*. Chicago: The University of Chicago. 菅野楯樹 中村雅之訳 (2001)「心のなかの身体 - 想像力へのパラダイム転換 - 」東京：紀伊国屋書店
- Jones, Daniel (1972) *An Outline of English Phonetics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 城生百太郎 (2001)「日本語教育シリーズ第3巻コンピュータ音声学」東京：おうふう
- 木田章義 (1988)「古代日本語の再構成」, 岸 俊夫編『日本の古代、第14巻 言葉と文字』東京：中央公論社
- 木村紀子 (2003)「古層日本語の融合構造」東京：平凡社
- 国立国語研究所 (1978)「国立国語研究所報告 60: x線映画資料による母音の発音の研究」東京：秀英出版
- 小林正憲 (2006)「古層日本語における流音の位置 恣意性と有縁性の問題に向かって」, 『四天王寺国際仏教大学紀要大42号』
- Ladefoged, Peter (2001) *Vowels and Consonants*. Malden: Blackwell Publishers Inc.
- Ladefoged, Peter (2006) *A Course in Phonetics*. Boston: Thomson Wadsworth.
- Liljencrants, L., and Björn Lindblom (1972) 'Numerical simulations of vowel quality systems: The role of perceptual contrast', *Language*, 48, pp.839-862.
- Maddieson, Ian (1984) *Patterns of sounds*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 正高信男 (1999)「言語的音声の獲得」, 小林晴美・佐々木正人編『子供たちの言語獲得』第2章、東京：大修館書店
- 松本克己 (1975)「古代日本語母音組織考 内的再建の試み」, 『金沢大学法文学部論集22』
- 松本克己 (1995)「古代日本語母音論 - 上代特殊仮名遣いの再解釈」, 東京：ひつじ書房
- 大野 晋 (1977)「音韻の変遷(1)」, 『岩波講座日本語5 音韻』, 東京：岩波書店
- 大野 晋 (1980)「日本語の成立」, 『日本語の世界1』, 東京：中央公論社
- Ricoeur, Paul (1975) *La Métaphore Vive*. Paris: Édition du Seuil. 久米 博訳「生きた隠喩」, 東京：岩波書店
- 阪倉篤義 (1966)「語構成の研究」, 東京：角川書店
- 関口存男 (1960, 1961, 1962)「冠詞 - 意味形態的背景より見たるドイツ語冠詞の研究 - 第1巻、第2巻、第3巻」, 東京：三修社
- 時枝誠記 (1948)「国語学原論」, 東京：岩波書店
- Tallerman, Maggie (2005) 'Initial syntax and modern syntax: did the clause evolve from the syllable?'. In Maggie Tallerman (ed) *Language Origins*. Oxford: Oxford University Press.
- 渡部眞一郎 (1996)「母音体系の類型論」, 音韻論研究会編『音韻研究 理論と実践』, 東京：開拓社



## On the primordial vowel system of Japanese : a semantic approach

Masanori KOBAYASHI

**Abstract:** The most widely known model of vowel system is probably Daniel Jones's Cardinal Vowels. The primary eight cardinal vowels are represented in a quadrilateral diagram, with the highest tongue position of each vowel plotted on the circumference of the figure. Vowel systems of this kind divide and utilize very efficiently the phonetic space assumed in the buccal cavity, distributing the vowels evenly within this space. This type of vowel system, a refined means of communication without doubt, is, however, very exceptional among languages throughout the world. The most widespread type is that of 5 vowels which is represented in a reversed triangle with [ a ] at the bottom and [ i ] and [ u ] at the upper corners. The five vowel system does not make full use of the phonetic space, leaving some part of this space untouched and unexploited. Natural languages have not evolved so as to achieve the most effective means of communication. The sounds of language are primarily not intended to be a means of communication, but they are, like bodily gestures, expressions of human effort to understand and represent the external world grasped in its phase of change and movement. The representative function of sounds, called sometimes *phonosemantics* or *sound symbolism*, must have been eminent on the early stage of natural language development. *Metaphor*, product of arbitrary and unrestrained imagination, has its origin in this representative function of sounds and has played a great role in the development of vocabulary of natural languages. The polysemy of natural language is the effect of metaphor. This paper pursues, through a study of a natural language, Japanese, the possibility to trace back the development of language up to the origin of vowel system to show how vowel articulation as a bodily movement resonated with the movement and change in the external world in order to grasp and represent as a conception the essence of the latter, generating thus the meaning of sounds and accordingly of words.

**Key words :** triangular vowel systems, quadrangular vowel systems, polysemy, metaphor,  
phonosemantics ( sound symbolism )